

517-396

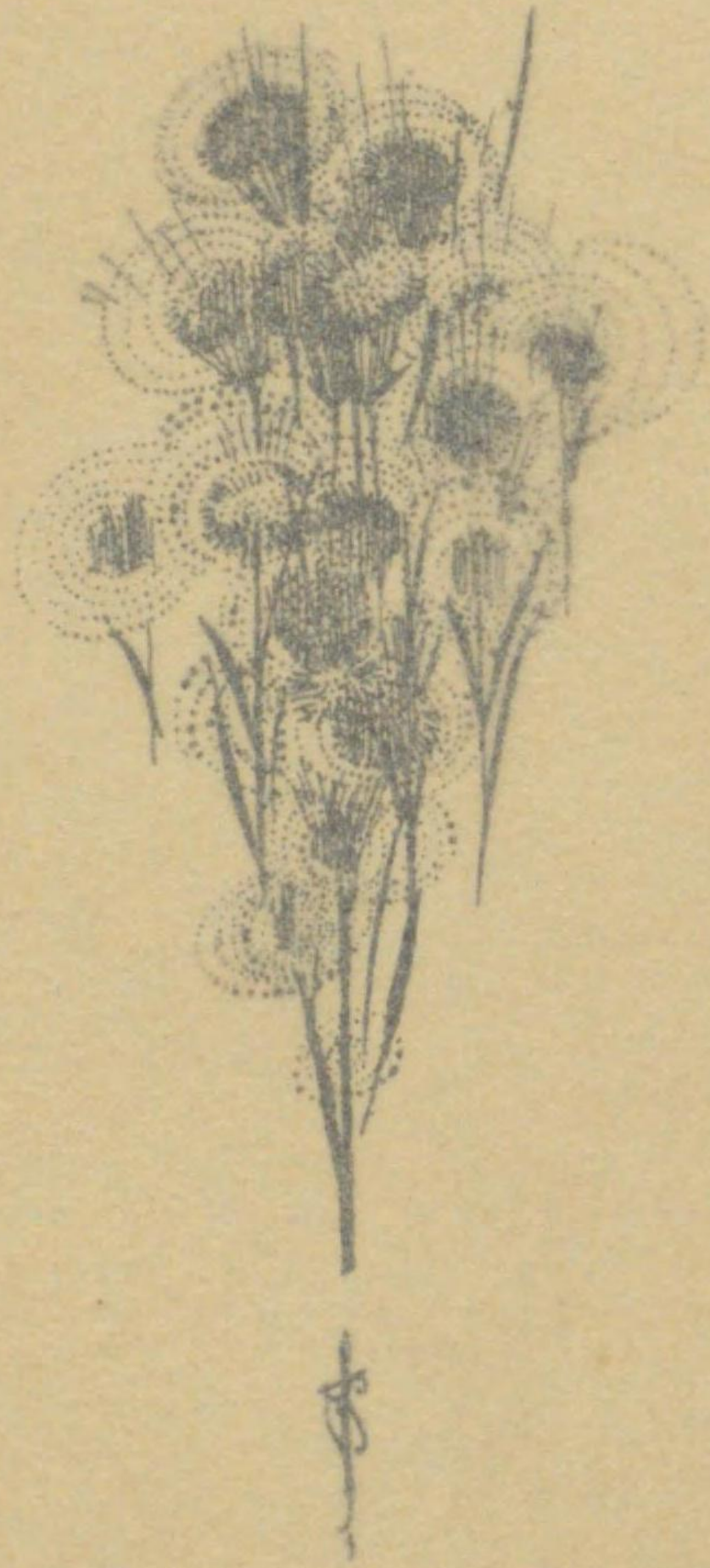


1200700366952





花の薊



夫正田福

社蘭交

花 の 薊



夫 正 田 福

社 蘭 交

517

396

薊の花は咲きたれど、

鋭尖とげいたければ

さはられず……。

—この書を心寂しき人の机上に贈る。

—著者—



I種

W



1200700366952

愛と悲しみの三部曲

第一部・搖籃の唄……………(一)

——生立より悲しき出發までの前奏——

第二部・薊の歌姫……………(五)

——寂しき愛と苦しみの序曲——

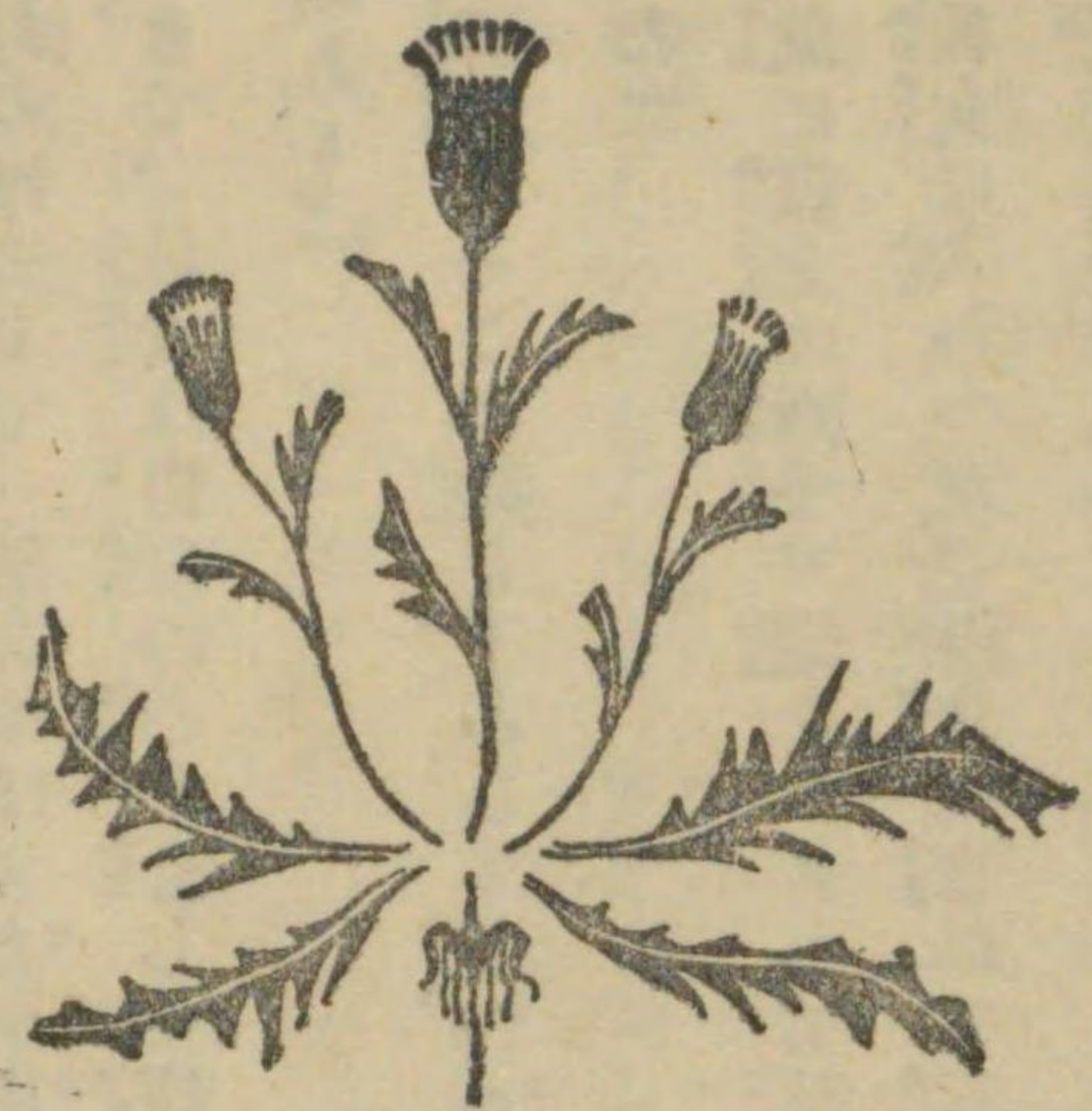
第三部・許されざる者……………(二九)

——永遠に失はれたる者への挽歌——

跋・「薊の花」のために……………(八五)

薊の花

第一部・搖籃の歌



風は曠原をしづかにゆすつてゐた。うら寂びた初秋をつ
げるその爽かな聲も、この夕は峯の霧の水氣をふくめて、
しつとりとうるんでゐた。母が搖籃をゆするやうに、村々
の眠り昏れる前に、それはやさしい子守唄をうたつた。さ
うしてすぐに林の中をやはらかく吹きとほつて、流れの瀬
音をさよめき合ひながらとほく消えて行つた。

『おうい。』

どこかであどけない子供の聲が呼んだ。

『おうい。』

かすかに畑の方で女の聲がそれにこたへた。風がその聲をはこび去ると、夕の色があたゝかく
野面をつゝみはじめ、丘の裾の森の中で、蝸が急に鳴き出してぱたりと止めた。山間の平野はひ

つそりとしづまつてしまつた。

その少し前、川下の小さい村にある熱海線の小さい驛を、由里子はうなだれて出た。さうして野の道を、彼女はとぼとぼと歩いて来た。流れにそふて、その湯ヶ原道は田舎家の前をぬけ、林の角をめぐり、ゆるく爪先のぼりになつてつゞいた。

野のほとりで、彼女はほつと小さい胸からさびしい息を吐いた。人影も見えない道そばの堤のわきで、彼女は自分の心が悲しく疲れてゐることを知つた。

『あゝ。』

彼女はそこに腰を下ろして、ちつと川の面をみつめた。流れは無心に、さよなみ立て、石を洗つてゐた。

急に彼女は両手で顔をおさへて泣き出した。

彼女は辛かつた。自分の生れて来たことが、むしように悲しかった。恥づかしくうらめしいやうな氣もした。

ひらひらと秋の蝶がどこからか迷つて来た。そして彼女の華美やかなモスリンの脊筋をみつけ

るとついと舞ひ下りて来たが、彼女の肩がふるえ出してゐたので、ひらりととび立つてしまつた。花模様の手さげカバンは草の上に投げられてゐた。しなやかな曲線を畫いてゐる紫の袴の上、切ない胸の涙が両手を洩れておちてゐた。すゝり泣きの聲が、尾を引くやうにしづかな空氣に悲しくひびいた。

物悲しい彼女の上を、風はまたしつとりとやはらかに吹きとほつた。

川上からその時十二三の少年が彼女を見つけてかけて来た。

『姉さん、いま歸つたのかい。』

『え。』

彼女は夢からさめたやうに立ち上つた。彼女の涙にうるんだ黒い瞳は美しかった。白い頬とほつた上品な鼻筋、あどけない小さい唇、その圓い顔はいくらか寂しさうに青ざめてゐたが、均勢のととのつた美しい線の處女型の姿と共に、魅せられるやうな匂はしさを持つてゐた。

けれど彼女が少年に泣き聲を見せまいと身をそむけた時、その右頬を醜くしてゐる、赤黒い大きなあざが見えた。それはべつとりと頬の半分をつゝんで、この天成の美しさをねたむ、悪魔の

影のやうにひろがつてゐた。

少年はあどけない瞳をくるくるとさせながら姉の様子を見のがさなかつた。

「姉さん、泣いてたんだね。」

少女は恥ぢらつた。

「まあ、太刀雄さん。」

彼女はかすかに笑はうとしたが、少年の次の言葉に胸をだいてうなだれた。

「大岡さんが先に姉さんを見つけたんだよ。」

ちらりと彼女はその人を、十歩ほどはなれた樹の蔭にみつめて、耳許までほてらせた。その青年はステッキをふりながら、彼女に近づいて来た。やつれた頬をしてゐるが、すらりと脊の高い彼の姿は、どことなく人を惹きつける生々したところを持つてゐた。

「やあ、いまお歸り。」

青年は快活に笑つた。しかしうなだれてゐる彼女が顔を上げた時、彼はその笑ひをすぐに殺してしまつた。彼の顔に、冷たい不快な色があらはれた。

「太刀雄君、もつと行つてみよう。」

彼は由里子に軽く挨拶して歩を移した。

「姉さん、ぢや僕は行つてくるよ。」

少年はまた姉の顔を心配さうにみつめたが、くると身をひるがへして青年のあとを追つた。

「姉さん、早くお歸りよ。」

彼は走りながらふり向いてその言葉を姉のために残した。

由里子はちつと二人を見送つた。彼女は心の中で、青年の顔にあらはれた冷たい色を思つてゐた。彼女はやるせなかつた。生れながらのこの頬、それが人の眼にうつる時、その人は冷たく顔をそむけてしまふ。さうしていつもそのために彼女は孤獨に泣かねばならなかつた。

「あの人もやつぱりさうなのだ。」

彼女はさびしくうなだれて、また涙のわいてくるのを、どうすることも出来なかつた。誰にでも取りすがつて泣きたいやうな、たよりない悲しさが胸にこみ上げてくる。涙の瞳を上げれば、夕はしづかにうすい夜霧の幕をこの曠野に垂れはじめた。

星一つ、それは夕日のあとを追つて、山の端にまたゝいてゐたが、早く雲のやうな霧の中にか
くれてしまつた。

山の霧は深いよ、

誰かそこで死ぬだらう。

彼女はふつと胸の奥でつぶやいた。霧の深い日に、山の奥で迷つて死んだ村の人の傳説が、悲
しく思出された。

「死んだ方が幸福かも知れない。」

霧は深い、山は険しい、そこにひとりで迷つてゐる。恐ろしいほどしづかな山中の枯野原を、霧
はまものやうにうごいてゐる。ふはつと白く身をつゝんで、やはらかいしとねのやうに、自分
を眠らせてくれる。疲れはてた自分がそこで死の唄にとりまかれる、悲しい涙をながして、自分
の生命が消えて行くのだ。そして霧がしつとりと草原によこたはつてゐる自分をつゝんだ。
どこかとほくで女の聲が呼んだ。

「おとよやあ　おとよやあ。」

それは村の母が娘を呼ぶのであらう。聲はかすかにひゞいて彼女の心をうつた。彼女は悲しい
死の幻からさめてぞつとした。

「あゝ。」

彼女は自分をつゝんでゐる夜の氣配を感じた。山は黒く、空は灰色にすゝけてゐた。

「歸らう、歸らなくてはならないんだわ。」

彼女はとぼとぼと川上に向つて歩き出した。林をめぐるると里の灯がほつかりととほくともつて
ゐた。その温泉場の小さい宿屋が、彼女の歸つて行く淋しい家であつた。

一一

由里子の母は、湯ヶ原温泉の草分けである。泉屋の一人娘として生れながら、一生を不幸にす
ごして、彼女が十一の時にさびしく死んで行つた。さうして残されたのが、彼女と三つ下の弟
の太刀雄であつた。

父を……彼女は知らなかつた。

それは死んだのではないが、彼女の物心がついた時、もう家にゐなかつた。彼女は祖父の良三を父のやうに思つて育つた。

少し大きくなつて、彼女には良三がいつも恐しく思はれた。それは少しのことにも、母を大聲で叱つて、時としてはうちたゞくのを見たからであつた。

「おちいさんは母さんを憎んでゐる。」

彼女の小さい心はそれにおびえてゐた。さうして祖父の良三になつかなかつた。

「由里子は親父のわるい血筋をうけてる。碌なものにならないぞ。」

彼女は良三が、母に冷たい顔をしてさう言つてゐるのをきいた。彼女は祖父が、家にゐない父をひどく憎んで、その上自分までもきらつてゐることがわかつた。彼女は恐しい祖父の眼からいづもかくれるやうにした。

彼女のよりすがるのはいつも母であつた。

彼女は小さい心にうたがつた。

「母さん、どうしておちいさんは私達をにくらしがるの。」

その時その母は涙をうかべて彼女をしつかりと抱いた。

「いゝえ、おちいさまは誰も憎んではいらつしやらないのだよ。わたしがみんな、みんなわるいのです。」

「どうしてなの。」

彼女はまたふしぎさうにたづねた。

「ねえ、よくおぼえておいで、おちいさまはわたしを可愛がつて育てゝくれたのだよ。それはひどく可愛がつてくれて、おばあさまがなくなつた時は、わたしが小さかつたけど、あとのおばあさまも貰はないで、わたし一人を大切にしてくれたのだよ。それなのに、わたしはおちいさまのいひつけにそむいたのです。」

母はそれからさめざめと泣いて言つた。

「わたしはおちいさまの言ふことをきかないで、わるいことをしたのです。おちいさまはわたしやお前達の父さんを許して下すつたけど、父さんがわたしやお前達をすてたのですよ。お前達の父さんが、おちいさまにわるいことをして、お家をだめにしてしまつて、行つてしまつたの。」

彼女も母と一しよに泣いた。そして自分にやさしい母を、すてゝ行つた父が憎らしいやうな気がした。

母はその時彼女をみつめた。

『お前も泣いてくれるのね。母さんはすぐにゐなくなるんだよ。おちいさまを大切にしてくれ。仲よくしておくれ。そしてお前はいゝ人になつて、おちいさまを助けて上げるのだよ。』

彼女はその時、泣きながら祖父と仲よくしようと思つた。しかしそれよりも、その母の方が、ほんとにかはいさうな気がした。

小さい彼女が母をなぐさめた。

『わたしいまに大きくなつて、母さんを幸福にしてあげるわ。だからわたしを、たんとたんと可愛がつてね。』

彼女はその時その母がさびしく笑つたのを見た。それはうれしいといふよりか、みじめにうたれたやうな悲しい笑ひであつた。さうしてその母はすぐに涙を流した。

『お前もこんなに、不幸に生れついて、きつと苦勞をするだらう。』

彼女は母がちつと自分の顔をみつめたのをおぼえてゐた。小さい彼女は母のそのなやみを知らなかつた。そして祖父の良三にはどうしてもなつかないで、たゞ母にだけとりすがつて、時としては美しい着物をねだつて困らせたりした。

彼女が友達の持つてゐる、大きな人形を母にねだつたことがあつた。その時分母は瘦せほそつて、ねたり起きたりしてゐたが、祖父の良三にかくして、小田原まで客を送つて行く番頭にそれを買つてくることをたのんだ。

人形はそつとその母の部屋に持ち込まれた。

彼女は母の枕許で古い繪本をひろげてゐたが、うれしさのあまり大聲をあげて、箱の中から人形を出してしつかり抱いた。

『大きな赤ちゃんだよ、母さん。』

母もうれしさにその様子をながめて、しづかに言つた。

『おちいさまにきこえると母さんが叱られますよ。ね、しづかにそれでお遊び。そしておちいさまに見せないやうにおし。』

けれど小さい彼女は、母の部屋でだけ、それを持つてゐることが出来なかつた。そして二三日の後、そつとそれを外に持ち出して友達にじまんした。その歸りに彼女は長い廊下の隅で祖父の良三にみつかつた。

「そりやあなんだ。」

良三は眼を光らせてゐた。

「に、人形なの。」

彼女はおづおづとこたへたが、それがまた良三の心をいら立たせたと相違なかつた。彼はそれを彼女の胸からひつたくつた。

「見せろ、誰に買つて貰つた。」

小さい彼女は嘘をつくことを知らなかつた。

「母さんに。」

彼女はどうなることかとおどおどとふるえた。良三はそれをつかんだまゝ、足音あらくその母の部屋に行つた。彼女も涙を腫にいつばいしながらついて行かねばならなかつた。

「あゝ。」

良三は荒々しく叫んだ。

「こんなぜいたくなものを買つてやつて、俺がこいつらの親父のためにひどい目にあつて、一生けんめいかせいでゐるのに、それも、それを考へないで。」

その母がなにか言はうとした時はおそかつた。良三はその人形の首に手をかけていきなり引きぬいた。それから手も足ももぎとると、そこに投げ出して叫んだ。

「變にかくしだてすると、子供達も家におかないぞ。」

「あ。」

その母は立ち上らうとして身を悶えた。良三が足音あらく行つてしまつてから、母は急に嗽き込んだ。

彼女がこはれた人形を拾はうとした時、母はかつとその手のハンカチに血を吐いた。

「あれつ。」

小さい彼女の叫び聲に祖父の良三がかへつて来て、あはてゝその母の脊をさすつた。そして女

中が来たのを彼はその手をふつて行かしてしまつた。

少し休まつてからその母は言つた。

「わたしがわるいのです。許して下さい。わたしがわるいのです。彼女はわるくはありません。良三はだまつてゐた。その母は涙をながしながらなほつとけた。

「みんなわたしがわるいのです。彼女を、彼女を、可愛がつて下さい。」

祖父の良三が、その母にかくすやうに涙をふいてるのを、小さい彼女は見た。そして彼女も悲しくなつて泣き出してしまつた。良三はなんにも言はなかつたが、その時から急に彼女を可愛がり出した。そして四五日後、こはされた人形よりか大きいのが、小田原から歸つて来た良三の土産として彼女の手にわたされた。そして田舎の方にあづけられてゐた太刀雄もすぐに呼び返されて来た。

三

母の病氣はその血を吐いた時からずつとわるくなつてしまつた。さうしてそれから少しも起

き上らなかつた。由里子が良三の土産の人形を見せた時も、さびしさうにはゝえんで、

「大切におしよ。」と言つたばかりであつた。

太刀雄が歸つて来た時、その母は子供のやうに「おいおいと聲を上げて泣いた。瘦せほそつてゐたけれど、その母はまだ美しく、死のうとしてゐる人には見えなかつた。

熱がさしてくるとその白い頬がぼつと赤くなつた。

「母さんはきれよ。」

彼女はそんなことを長く泊まつてゐる客に言つたりした。

それは冬から春に移らうとする、南の國では日ざしのあたゝかい午後であつた。小さい彼女が外の遊びから、友達にいちめられて泣いて歸つて来た。

男の子供達が言つた。

「鬼の子やい。お前の父さんは銀行の金をぬすんで牢に行つたんだ。」

「そのばちで、お前のほつべたに鬼のあさが、ついてるんだ。」
彼女もまけてゐなかつた。

『うそよ、これは母さんが、私のおなかにゐた時、火事を見たからよ。』

『さうだないよ、鬼あざだよ。』

『鬼の子だから、嫁に行かれねよに、印つけられたんだ。』

『嫁になんか行かないよ、だ。』

小さい太刀雄が彼女のひびきをした。

『姉ちゃんはおうちの嫁にならんからいゝんだい。』

男の子供達は太刀雄をとりまいてすぐにいぢめた。なかにはうつものもゐた。

『弟のくせに、姉の嫁とるか。』

『これも鬼の子だ、泣かしてやれ。』

彼女もその子供達をおしとめようとしてうたれた。二人の味方になつてくれる友達はなく、さんさんにうたれたりこづかれたりした。そして姉と弟は泣いて歸つて来たのだつた。

彼女のあとを太刀雄も泣きながらその母の部屋に來たが、附いてゐる看護婦になぐさめられると泣き止んで一しよに出て行つた。

その母が由里子にたづねた。

『どうしたの。』

『父さんが銀行のお金を使つて、牢に行つた鬼だつて、そしてわたしは鬼の子で、鬼あざがあるんだつて。』

母は苦しさに眼をつぶつてゐた。それから涙をながしながら眼をひらいた。瘦せたその手がしつかりと小さい彼女の手をつかんでゐた。

その母は言つた。

『お泣き、泣いておくれ、お前は不幸なんだよ。』

その眼はうらめしさうに空をみつめて、彼女の上に落ちた。

『お前の父さんは牢に行かなかつたけど、そのために家はだめになつてしまつた。父さんはその上にわたし達をすてゝつた。ねえ、わたしを許しておくれ。さうしておちいさまと仲よくしておくれ。けれど、けれど、父さんは東京にゐるけど、きつと憎んでおくれ。わたしは、わたしは、お前の父さんを、許さないのだよ。恨んで、悲しんで、かうして死んでゆくのだよ。』

小さい彼女は母の様子におびえた。しかし母と一しよにその父を憎んだ。その母をそんなにまで悲しませる、その父をかきむしつてやりたい気がした。そしてその母の言葉に、小さい頭をうなづかせた。わるい男の子供達にかきむしられた髪がばらりとくづれ落ちて来た。

その母は瘦せた手をのばして、彼女の額髪をなで上げてくれた。

「お前は大きくなつてから、父さんに逢ふかも知れない。でも口も利かないがいゝ、そしてたゞ、わたしが父さんを許さなかつたと言つておくれ。母さんが死ねば、お前は太刀雄と二人つきり。おぢいさまは頑固だけど、ほんとはいゝ人なのだ。言ふことをよくきいて大きくなつておくれ。他人にだまされしないで、心をしつかり持つて、誰でも見かへすやうな人におなり。」

その母は喘いで息を切つた。せつないその呼吸の間にも、母はちつと彼女を見守もつて悲しく頭をふつた。

「あゝ、可哀さうにねえ。でも、由里子や、お前はこれから一人でくらすのだよ。一生一人であるのだよ。決して、決して、誰にでもだまされてはいけないのだよ。」

看護婦がその時這入つて来た。そしてその母の變つた顔色を見ると、あはてゝ手をさしのべた。

「母さまは大變おわるいんですから、あちらにいらつしやいね。」

母はそれをきくと強く彼女の手にぎつて言つた。

「あゝ、行つておくれ。けれどいま言つたことを忘れないでねえ。」

瘦せほそつて、苦しく喘いで、うるんだ腫を輝かしてゐたその母を、由里子は長く忘れなかつた。涙は辛いその母ばかりのものではなかつた。小さい彼女もやはり、その母を思ふと涙と共に心に咬くのであつた。

「いゝ母さん、かはいさうに、ほんとにかはいさうに。」

四

母の死は、ふいに來たやうに思はれた。その前の日、その母は非常によいやうに見えた。そして床の上におきなほつて、小さい彼女の髪を亂れをかきなほしたり、太刀雄をそばに呼んで、學校のことをきいたりした。

翌日、由里子は心をさがして學校から急いで歸つて來た。その時母はもう口も利けないで、

使ひが彼女と行き違ひに學校に行つたことがわかつた。

その母は太刀雄をそばに坐らせて、燃えるやうな瞳でそれを見つめてゐたが、彼女がそこに行くとき、しびれた手をあげやうとして、その瞳をうごかした。

母は死のうとするすぐ前の人とは思はれないほど、美しい顔をしてゐた。

そしてその瞳は焼きつくやうに、二人のわが子に向けられ、喘ぐやうに唇がふるえて、わづかに言葉が洩れた。

『な、か、よ、く、ね。』

彼女は小さくてわからなかつたが、母の祈るやうなその瞳、かぎりない悲しさと不幸のまゝで死んでゆきながら、自分達のためにどんなにいろいろのことを祈つてくれたか、その心持だけはわかつた。

母はその死の終りまで、たゞわが子のために祈つてゐたに相違ない。『この子供達を幸福にして下さるやうに、』と幾度か涙をこめてつぶやいたに相違ない。……さうして櫻の蕾のかたい、桃の花の咲きはじめた三月に、母はかぎりない愛着を二人の子供に残しながら、山下の林の

そば、苔蒸した墓の下に葬られた。その生涯は寂しく、涙と共に彼女は朽ちて行くであらうが、母の心は長く地上にとどまり、さうしてその魂は空の清らかな星々と共に、地上のわが子を見つめてゐるであらう。

空の母星よ、いつも

地上の悲しみをみつめてゐよ。

夜の空に慄えてゐる星はいつも泣いてゐるのだ。さうしてその心は、小さい彼女の胸に長くのこつてゐた。

母のない後の由里子は廣い野原に咲く月見草のやうであつた。祖父の良三は彼女を可愛がつてくれた。しかし彼女が泣きたい時、それは取りすがつて泣ける母ではなかつた。さうして彼女はやうやく自分の、他人に恥づかしい姿を知りはじめた。

母なればこそ、それをいたはつてくれた。しかし祖父の良三はそれを考へるためには、家の仕事が多く、涙ぐんでゐる小さい彼女の心を、なぐさめるほどにやさしい心のひまを持つてゐなかつた。いろいろの不幸が、そこにこの家をつんで、年老つた良三を、あれこれと苦しめてゐた。

さうして小さい彼女はまた、その祖父の苦しみをなぐさめるには、あまりに小さく、あまりに子供であつた。

良三は彼女の涙を見て言った。

『べ、べ、べ、そしないでくれ、俺を心配させないでくれ。』

彼女はどこによりすがらう。たゞ小さい弟の太刀雄が彼女をかばつてくれた。彼女は自分の醜い姿ばかりに、誰も仲よくしてくれなかつた。さうしてまたその父故に、村の人達からもよそよそしくされた。

その寂しさに泣く時、弟だけがやさしく彼女をのぞき込んだ。

『姉さん、なに泣いてんの。』

それは小さい天使のやうに言つてくれた。

『およしよ、泣くと死んだ母さんが、涙の壺を抱いてるんだつてさ。そしてそれが重くなると、

とほいところにこぼしにゆかなければ持てないんだつて、僕は話にきいたよ。』

おとぎばなしでも、それは太刀雄にとつてほんとに思はれた。そして彼女もその話から泣くこ

とをこらえようとした。

『わたしをいぢめる人達を見かへしてやるんだわ。』

彼女はさう思つた。

けれど彼女はまだ小さくて、なんのあてどもみつからなかつた。さうして時々は蔭でそつと泣いて、太刀雄さへもそれに誘はれることがあつた。そんな時二人は手を取りあつて、母の墓のために野の花をつみにゆくこともあつた。さうして年々は、風のやうに早くすぎて行つた。そのうちに彼女は小學校を出て、祖父の良三にねだつて小田原の女學校に通ふやうになつた。

『女が學問しなくつていゝ。』

『でもわたしは、わたしは學問しなくつては。』

彼女の一生けんめいな言葉を、良三は笑つて入れてくれた。

『さうか、さうなのか。』

良三はさう言つて、ぢつと彼女をみつめて顔を曇らせた。その時こそ、彼女はその祖父のやさしい心を知つた。さうしてうれしさと悲しさに涙ぐんでしまつた。

しかし女學校も彼女にとつてたのしいところではなかつた。入學するとすぐに、彼女に綽名がつけられた。

『薊さん。』

彼女は蔭ではさう言はれて、誰からも好かれなかつた。

『いゝわ、なんとも言ふがいゝわ。』

さう思つてゐても彼女はそれが苦しかつた。さうして友達のみそやかな話に、そつと耳をかたむけてゐた。たまになぐさめようとよつて来る友達にも、いつか彼女は白い齒を向けるやうにさへなつた。

『あそばなう。』

『いゝえ、私は一人でいゝの。』

彼女は冷く言ひかへした。そして鬼薊の刺のやうに、堅意地になつてわざとのけものになつてゐた。さうしていつか彼女は學校中ののけものとして、全く友達から對手にされなくなつてしまつた。

祖父の良三は彼女を可愛がつてくれた。しかしそれは可愛がつてくれるばかりでなく、なに事でも自分のいひつけには背かせまいとする風もあつた。

少しの口答へでも彼女は許されなかつた。

『學校から歸つたら帳場に坐るんだ。』

彼女はそれを言ひつけられた。少しでも他人に姿を見せるのが辛い彼女に、そこは地獄の針の山のやうに思はれた。

『學校に行つてゐるばかりではだめだ。家のことも習はなくては。』

良三はさう言つて、彼女が帳場に坐つて、いくらかでも女中達に指圖をしたり、客に應對したりしてゐるのを見るとよろこんでゐた。彼女の毎日はさうして恥づかしく悲しく、學校では孤獨に寂しく、家では祖父の良三の下に小さくいぢけて過ぎて行つた。それは彼女にとつて涙の日々であつた。いくら決心してゐてもその重荷は、背負ひ切れない悲しみとなつて彼女を泣かせてゐた。

夢のやうに悲しい日々がすぎた。彼女の十六の夏は、忙しい客の應對、その恥づかしい苦しさを過ぎて行つた。秋が来て、彼女はまた朝々を早く、とほく小田原まで女學校通ひをはじめた。それは彼女の三年の二學期であつた。

あたゝかい南の國にも涼しい風が吹きそめ、秋空高く、女學校の生徒たちの顔も生々と輝いてゐた。

彼女の通つてゐるOK女學校では、毎年十月のはじめに學藝會を催すことになつてゐたが、その人選をするため、その日生徒達と主任教師との相談がはじまつた。そして三年の甲組では授業後にまで残つて、その相談をつゞけてゐた。それらの催しが、各組の競技會となつて、あとの投票で優賞旗の争奪があるがために、なほ更彼女達は氣が立つてゐた。

催しの一つは合唱にあはせての獨唱であつた。そのうたひ手を選むために、主任教師と生徒達の間には反對な意見がおこつた。

主任のY先生は國語の受持であつたが、前以て音樂のK先生とうちはせてゐた。そしてたゞ一人壇上に立つて獨唱するうたひ手に由里子を決めてゐた。組の中で勢力のある竹内君江がそれをきくと立ち上つた。

「先生、泉さんでは駄目ですわ。」

「なぜ。」

Y先生は眉をひそめたが、君江は馴れ馴れしく言つた。

「あの方、菊さんですもの。」

組中の者がわつと手をたゝいて笑つた。そして互にさゝやきあつた。

「だめよ、菊さんなんて。」

「さうよ、あの顔でぶちこはしてしまふわよ。」

「外にいゝ人があるわ。」

中には大聲できこえよがしに言ふものがあつた。

「先生にえらばれたつて、菊さんが自分で止めるのが本當だわ。」

多勢まほせいの中なかでたつた一人ひとり、黙だまつてうなだれてゐる者ものがあつた。恥はづかしさと、うらめしさと、悲かなしさに、彼女かのぢよは顔かほも上げなかつたが、それは當たうの本人ほんじんの由里子ゆりこであつた。

彼女かのぢよは指名しめいされた時はつとした。そしてすぐに立ち上あつて斷ことわらうとしたが、それより早く君江きみえが立つたのだつた。彼女かのぢよは自分じぶんとしてもさうした晴はれの場所ばしょに、その姿すがたをさらすことがいやであつたが、そのために多勢まほせいのためにあざけられると、えらんでくれた先生せんせいでさへうらめしかつた。かたくうなだれた彼女かのぢよの腫めに涙なみだがわいて來きたが、彼女かのぢよはぢつとこらえてゐた。

Y先生せんせいはぢつと考かんへた。それからうなだれてゐる彼女かのぢよをみつめてさびしくほへんだ。

『泉いづみさんがいゝと思おもひますけど。』

彼は組ぐみの者ものを見みまはしながら、なぜか唇くちびるをふるはせた。

『そして音楽おんがくのK先生せんせいも泉いづみさんをえらんだのですけど、泉いづみさんがいけないのなら、この合唱ゴラスは止とめにしたらどうです。K先生せんせいは外ほかの方かたではむづかしいと言いつてゐますよ。』

生徒達せいとたちは黙だまつてしまつた。Y先生せんせいの言葉ことばはやさしいけれど力があつた。由里子ゆりこはわつと聲こゑをあけて泣なきださうとして、ハンケチをくはへてそれを熱あつい胸むねの中うちにのみ込んだ。涙なみだはしかしとめど

なく、彼女かのぢよの膝ひざに落おちてゐた。

Y先生せんせいはなほつゞけた。

『天才てんさいといふものは、さう多く生うまれるものではありません。そして東京とうきやうの音楽おんがく學校がくでも秀才しやうさいとしてうたはれてゐたK先生せんせいが、泉いづみさんをめづらしい音楽おんがくの天才てんさいだと言いつてゐられるのです。天才てんさいはその人ひとひとりでなく、またこの組ぐみばかりでなく、廣ひろい人生じんせいの寶物ほうぶつなのです。私達わたしたちは泉いづみさんを尊敬そんげいしなくてはならないのです。そしてあの方がこの組ぐみにゐられることを誇ほこりとしなくてはなりません。竹内たけうちさんの輕かろはづみなお言葉ことばには、私わたしは感心かんしん出來きないのです。』

わつと聲こゑをあげてその時とき泣なき出した者ものがあつた。それは由里子ゆりこではなかつた。彼女かのぢよは泣ないてはゐたが、うなだれてこらえてゐた。さうして聲こゑをあげたのは、彼女かのぢよを批難ひなんした竹内たけうち君江きみえであつた。女學校ぢよがくがうは町立ちやうりつで、君江きみえはその町まちばかりでなく、その縣けんでも富とみと名なを知られてゐる家の愛娘まなむすめであつた。その父ちちの勢力せいりよくは彼女かのぢよをも女學校ぢよがくがうで勢力せいりよくあるものにしてゐた。そしてその父ちちの言葉ことばによつては、女學校ぢよがくがうから教師けうしが追おはれることがあるかも知しれなかつた。

Y先生せんせいは苦にが々くしく笑わらつた。

『とにかく私はさう決めることにしますが、皆さんの心持もK先生につたへることにしませう。さうしてこのことはK先生に決めて頂くことにいたします。』

Y先生はそのまゝ軽く眉をひそめながら、壇上を下りると靴音を立てて行つてしまつた。由里子がちらつと瞳を上げた時、その横顔は青ざめてゐるやうに見えた。

生徒達は急にしやべり出して立ち上つた。中には泣いてゐる君江のところにかけてけるものもあつた。

君江の聲が高く由里子の耳にひびいた。

『いゝわ、あんなえこひゐきして。わたし父さんに言つて、Y先生なんて學校にゐられないやうにしてやるわ。』

『ふん、あんな薊さんが天才ですつて。』

『これから薊の天才つて言ふがいゝわ。』

外の聲もまたきこえよがしに彼女にひびいた。彼女はそつと立ち上つて、まだ立ち上つても歸らずにゐる生徒の中をすりぬけた。

廊下に出ると、一人幾らか彼女に好意を持つてゐる松尾房子がばたばたと追つて來てすりよつた。

『泉さん。』

『……………』

彼女は黙つてふり返へつたが、その瞳にはいつばい涙が溢れてゐた。

『あなた、大變よ。先生に言つてあなたから斷つて止めた方がいゝわ。』

房子は彼女と並んで歩きながらつとけた。

『學藝會なんてに出たつて、それな名譽でもないわ。ねえ、辭職勸告よ！あなたから竹内さんを推選なさいよ。竹内さん自分で出るつもりでゐたんだわ、きつと。』

房子は笑つたけど、彼女は笑へなかつた。房子のおどけたのが、かへつて彼女を悲しくした。

『えゝ、どうせ私、斷るつもりでゐるの。』

『さう、それがいゝわ。そして竹内さんを推選すれば、あなたも憎まれずすむわよ。』

彼女は房子の言葉が、親切からであることは知つてゐた。しかしなぜか、かあつとするやうな

血のほてりを感じた。

『憎まれたつていゝの、憎まれたつて。』

彼女はさう言つてそこで地團太ふんで、組の者全體を呪つてやりたかつた。しかし彼女はすぐに青ざめて行く寒さを感じた。そして唇を噛んで黙つてしまつた。

彼女はすぐ房子にわかれて、運動場を横切つて、教員室の窓下に立つた。

Y先生はそこにK先生と机を向き合せてゐたが、すぐ立ち上つた。

『泉さん、なにか用ですか、こちらにお上りなさい。』

彼女は黙つて見上げた。そして美しいK先生がやさしくほゝえんで立つたのを見ると、恥づかしさと悲しさに逃げ出したいやうに思つた。

しかし彼女はすぐ心で迷つてゐた考へを言つてしまつた。

『先生、わたし、わたし、有難いのです。けれども、が、學校を止めますから。』

『あ。』

Y先生が教員室をめぐつてかけるのが見えた。K先生もそのあとを追つた。それはそこから玄

關に廻はつて、彼女をとらへるために來るのに相違なかつた。

彼女は急いでかけ出した。自分でも、どうしてだかわからなかつたが、獵犬に追はれる兎のやうに、たゞ夢中でかけつゝけた。心の中でとらへられたいやうな、また思ひもかけずに言つてしまつた取りかへしのつかない言葉を悔いながら、勢にまかせてゐた。あとから出て來た同じ組の生徒達が散らばつてゐる中もかまはずにかけとほつた。

彼女はふり返へつても見なかつた。息をはづませて走つた。やるせない悲しさを胸に抱いてどこまでも走つてゐた。さうして學校の門をとほくはなれて、聲もとどかない横道に走りこんで止まつた。それからぼうつと青白い煙にでもつゝまれたやうな、疲れきつた歩みを、とほとほと運んで停車場に辿りついた。

凡てが夢のやうであつた。しかし夢としても、それはなやましい悪夢のやうに、冷たい汗とつかぬものが、背筋をうすらさみしく流れてゐた。それがその日の悲しい彼女の出來事であつた。彼女はさうして湯ヶ原驛から、家路をたどる途中で泣いた。不幸な彼女にとつて、それは恐ろしいほどに、どうしていゝかわからないことであつた。彼女は今日の一日ばかりでなく、翌日の

ことも苦しまねばならなかつた。女學校に行かないわけ、彼女はそれをうちあけられないことを知つて、祖父の良三さへ恐しく思はれた。

六

由里子が家の前に着いた時、あたりはすつかり夜につままれてゐた。彼女は明るい家の中をのぞき込んでどきりと胸の鼓動を高くした。夕方になると店の奥に引込んでしまふ祖父の良三が、帳場に坐つて不機嫌な眼を光らせてゐた。

女中を吐つてゐるその聲がついぬけにひびいて來た。

『八番さんになぜ早くお膳をとほさないのだ。最終でお立ちだといつて急いでゐらつしやるぢやないか。』

彼女は祖父の良三の前に苦々しく坐つて、黒い顔の半面を灯にほてらせてゐる四十男を見た。

それは小田原の高利貸の金田仙藏であつた。憎らしく唇をゆがめて、ねちねちと良三をながめてゐる様子が、また濟さない金のことを責めに來たに定まつてゐた。

長い間責めても金の出来ないことがあると、金田はよく泊り込んで、良三の翌日の命策を待つことがあつた。奥二階のいゝ座敷を占領して、泊り賃は一文も拂ひはしないのに、酒を持つてこさせたり、時には帳場にゐる由里子を呼びによこしたりした。

そんな時彼は由里子に言つた。

『この家は、わしが金を入れてるから持つてゐるんですぜ。嬢さん、あんたにも感謝して貰はなくてはならんね。』

彼女は意地つよく、なんにも言はないで膝に手をおいたが、時としては祖父の良三が一しよに酒の對手をしてゐて、

『お酌を。』

など、彼女に金田への酌を強いることがあつた。彼女は悲しさを呑み込んで、白い手に酒徳利を取り上げるのだつた。そしてすぐに迂るやうに、その部屋から逃げ出したが、そんな時彼女は祖父の良三さへもうらめしく憎らしく感じた。

その金田が店先にゐる、と思ふと彼女はなほ更家に這入り憎かつた。そしてあとで吐られると

は知りながら、そのと裏口にまはつて、木戸口から庭づたひに自分の部屋に這入つた。そこはその母が最後の息を引きとつたところで、いまは彼女と太刀雄の居間になつてゐた。

彼女は机の前に坐つてぼんやり考へてゐた。泣くことももう出来なかつた。あしたはどうしたらいいだらう、彼女は身體がつめたく慄えて来るほど、そのことを心配した。頑固な祖父の良三には、それをうち明けることの出来ないことはわかつてゐた。

『言へば、母さんのやうに、私はうたれるかも知れない。』

彼女の小さい胸はその恐しさに、どきどきと高く鳴つた。けれどもう學校には行けないし、私は、私は、どうしたらいいのだらう、彼女の考へはその同じことを、いつまでも苦しみつけてゐた。

野のほとりで泣いてゐた時には、まだ朗かな明るい光が、小さく胸に光つてゐた。『死んだつもりになつて、おぢいさまに言はう。そして東京にやつて貰はう。東京に行つて音楽を勉強しよう。』そんなことを思つたのだつた。けれど陰氣なその部屋では、それはどうしたつて出来ないことが、はつきりわかつて來た。祖父の良三が自分を手離してくれないことはわかり切つてゐたし、

東京に行つて勉強するためのお金を出すことが出来る筈が無かつた。

大きなこの家を、ひどいやりくりでつゞけてゐること、それを彼女は祖父の良三からはつきりきかないでも、帳場の毎日の苦しきを見て承知した。大きな金庫があつても、その中は借金の證文より外になかつた。彼女のためにその母が貯めておいた郵便貯金の四十圓ほどですら、

『すまないが貸しておいてくれ、あとで倍にして返すからな。』

と、良三が取り上げて、金田にやる利息にした。月末に出入りの魚屋が坐り込んでうごかないこともあつた。きちんと給料がわたらないので、料理番があくたいいついてとび出したのも近頃であつた。

長くゐた女中が暇をとつて近くの新しく出来た宿屋に住み込んだが、その女中から預つてゐるお金を返すことが出来ないで、死んだ母の着物類をうり拂つたことも知つてゐた。

その一枚を彼女が残しておきたいと言ひはつた時、良三は不機嫌になつて言つた。

『だめだ、それは大分金目になるものだ。』

それらの悲しい數々、それがすぐに彼女の小さい胸に思ひ返されて來た。

「だめよ、なにもかもだめよ。」

彼女は自分で自分に言った。古びくさつてゐるこの家の空気が、自分にもしみ込んでゐて、拂ひのけることの出来ないやうにも思はれた。

太刀雄が歸つて来た。

「姉さん、こゝにゐたのかい。おぢいさんがいまだ歸らないつて言ふから、そこで逢つたつて言つたら、「なにをそこらでしてゐるんだ」つて怒つてゐたよ。早く帳場に行かないと叱られるよ。」

「え。」

彼女は立ち上つて袴をぬぐと、すぐに着物を變へた。袖の長いそれは、背の高い彼女を十八位に見せた。

「姉さん、早くおいでよ。」

太刀雄におし出されるやうに、彼女は長い廊下をつたはつて帳場に行つた。

「いつ歸つたんだ。」

祖父の良三は眼を光らせてゐた。

「しまよ。」

「表から這入れ、おそくなつて裏から這入つたりして、俺の眼からかくれる算段ばかりしてゐるな。」

「すみません。」

彼女は金田がそこにゐないのを見てほつと安心した。女中達も忙しさうにかけ廻はつてゐて、祖父と彼女の氣まづさを見てゐる者はなかつた。

「早く飯を喰べて坐つてくれ。金田さんが來てるんだ。俺は行かなくてはならない。」

良三はその方の屈托があると見えて、不機嫌ではあつたが、あまりくどくどと言はなかつた。

「御飯はなんだか喰べたくありませんの。」

「さうか、でも身體をわるくするといけないぞ。」

「大丈夫ですわ。」

彼女はさみしく笑つた。良三は忙しさに煙管と煙草入れを取り上げると、いま迄見てゐた證書類をそろへて立ち上つた。老眼鏡の中に光つてゐるその眼も、なにか落ち着かないやうに見え

た。さうしてそゝくさと行く後姿はどこか影のうすいやうにしほれてゐた。彼女はそれを見や
つて、また涙ぐましい悲しさがせまつて来るのをおぼえた。

七

運命よ、その糸は、

麻のやうに亂れてゐる、

光のない地上に、

人生はその麻の糸を引く、

長くはてしなく、

久遠につゞく、その亂れ！

あゝ、人は生れて来た、

生れて来て伸び育つて行く、

麻糸のごと、

めぐり行く運命に、

はてしなくあやつられて。

その夜のことであつた。おそくなつて用をしまつた由里子が帳場を立つた時、祖父の良三が青ざめた顔をそこに見せた。

『由里子、おそくなつてすまないが、ちよつと話があるから、私の部屋まで来てくれないか。』

『は。』

由里子はそのやさしい言葉をふしぎに思つたが、おとなしくあとにつゞいた。うす暗い帳場の裏の廣い部屋、そこが孤獨の幾十年をすごして来た良三の、さびしいかくれがであつた。

そこは店からとほくはなかつたが、陰氣にも、錆びて、裏庭のかけひの音が近くさびしくきこえた。使ひふるした大きな箆や長持の蔭に、良三の床が一つ、ぼつんとべられてゐた。

『お坐り、そこに座布団がある。』

良三はうち沈んで自分は何どこの上にとつかと坐つた。いま迄金田の酒の對手をしてゐたらしかつたが、妙に青ずんだ顔は酔つてゐるやうには見えなかつた。

彼女はこたへた。

『私、いりませんの。』

『さうか。』

良三は黙つてしまつた。そしてまじまじと彼女をみつめた。それからなにか言はうとして唇をふるはせたが、そのまゝ黙つて手をのぼすと、煙草盆を引きよせた。

一服、その間を彼女は非常に長い氣がして、胸が早鐘のやうに鳴つた。

良三が口をひらいた。

『由里子、到頭こゝのうちに來るところまで來てしまつたよ。』

『え。』

彼女はおどろきの瞳を見はつた。

『ねえ、だめなのだ。金田さんの借金がどうしても返せなくなつてしまつたのだよ。私達の先祖からつたはつたこの家が、あしたにも取られてしまうのだ。私はこの年になつて、おめおめこのうちをつぶして、いゝ恥をさらすのだ。それも言ひたくはないが、お前の父親のためだ。彼が私

の判をぬすみ出して、勝手に金を借りまはつたためなのだよ。』

彼女の小さい胸は、この家がつぶれるときいた時、もうわくわくとしてしまつた。そしてぼうつと祖父の良三の顔をみつめた。

『お前はまた子供だ。けれど、けれど。』

良三は言ひしぶつて煙草をつめようとした。しかし彼はその手をふるはせて、それをはたりと落とすやうにおいた。

彼女もがたがたとふるえ出した。どうして私にこんなことを言ふんだらう、彼女はおそろしくてたまらないシヨツクをその祖父からうけ取つた。

良三はやつとこのことと言つた。

『けれど、けれど、お前なら、いゝえ、お前の力で、この家は救はれるかも知れない。私は…』

彼は両手をついて、彼女の前に頭を垂れた。

『私は、お先祖さんに代つて、お前に手をついてたのむ。この家を助けておくれ。』

呻くやうに良三は言つて、その顔をあげて彼女を見た。彼女はおびえてしまった。血をあびたやうな祖父の顔をみつめて、ぞつとして身をすくめた。

『なあ、どうだ、家のために、この家のために、お、お前、身をすてゝくれるか。』

なにか寒い冷たい、氷のやうなものが、彼女の身體を吹きとほつた。彼女は蛇に見こまれた蛙のやうに、青ざめて身をうごかすことも出来なかつた。

彼女はやつと、やつとしやがれた聲を出した。

『お、おぢいさま、ど、どうしてですの。私、私が、助けるつて、この家を……。』

『お。』

良三は苦しげに叫んで、ちつとうなだれた。

それからよろよろと立ち上ると、佛壇の前にすゝんで、その扉をあけた。そして、べたりとひれふして顔を上げた。

『御先祖さま。』

良三の聲は泣いてゐた。

『こ、この子供は、な、なんにも知りません。ゆ、由里子や。』

良三は彼女を呼んだ。

『こ、こゝにおいで、こゝにおいで、こゝに来て、御先祖さまを見るのだ。おがむのだ。こゝに御先祖さまが、そしてお前の母さんが、さびしいお前の母さんがゐらつしやる。』

彼女も泣きながらゐざりよつた。そしてこの哀れな祖父と孫は、手を合せて涙ながらに祈つた。なにを祈つたのか、それは魂の救ひをであつたが、その救ひを求める祈りも、倒れて行く家のさゝへにはならなかつた。

人生は、涙でさへ、

そして祈りでさへ、

救はれないほど冷たいのだ。

しばらくして祖父の良三は、やさしく彼女の手を取つて言つた。

『わ、私を、鬼だと思へ、いゝか、私を蛇だとも思へ。私を憎んでくれ。だが、だが、お前は私の言ふことをきいてくれ。』

彼は老の眼に涙をながしてつとけた。

『金田も鬼だ。地獄だ。あの男は、あゝ。』

彼は黙つて彼女の頭をなでさすつた。

『不幸な子、お前は生れた時から、こんな不幸に生れついた。な、な、金田はお前のやうな小さい者を、金の代りにしろといふのだ。お前が、お前が、それをきけば、今迄の金をみんなお前にくれるといふのだ。』

『あ。』

彼女はとびのいた。

彼女の苦しみは、彼女をませさせてゐた。彼女にはそれがわかつた。彼女はなんにもこたへないで泣き伏してしまつた。

八

その夜の曉の頃である。その家の暗い帳場にこそ、そこそこ影があつた。影はやがてそこ

をはなれて、小さい包みを取りあげると、そつと押し戸をあけた。そして小さい下駄の音をたて、軒下をはなれると、空を仰いで頭をふつた。

曉の空には星が光つてゐた。

その影は家に向つて手を合せた。咬くやうな聲が洩れた。

『おぢいさま、許して下さい。私は、私は、東京にまゐります。そして立派に成功して歸つてまゐります。どうぞ、それまでたつしやでゐて下さい。——（その影は空を仰いだ）神さま、私を許して下さい。私を、私の不孝を、どうぞ許して下さい。』

それは由里子であつた。彼女はその夜を眠らずに明かした。そして小さい心に決心してしまつた。『東京に行かう、音楽家として成功しよう。どうして金田のやうな人の、言ふことがきかれよう。』

彼女は走り出した。それから村の入口で、石段をとぶやうにのぼつて、右手の墓地に這入つた。小さな墓、彼女はその前にぬかづいた。

『母さま、私はおぢいさまにそむきました。けれど、けれど、おぢいさまに恩返しをいた

します。この私を、私を、許して下さい。そして私を守つて下さい。』
彼女はまた走つた。追はれるやうに、たどかけて行つた。夢のやうに、希望はそこに、曉と共にうすく光つてゐたが、彼女はそれにも気がつかないほど懸命にかけつゞけた。
どこかで鶏が聲高く鳴いた。夜明けは海の方から白みはじめて、道はほの明るかつた。彼女は林の蔭ではたとつまづいた。

『あ。』

彼女はころびさうになつて、やつとふみとどまつたが、その時氣が付いて後を見かへつた。
うす暗い曉を、點々と彩る灯、それは彼女の搖籃の里であつた。夕にそこらうち沈んで歸つて行き、曉にそこを離れて行く身は、ほんとに寂しく彼女の心にひゞいた。苦しく育つたとは言へ、そこにはいろいろの思出が數多く残つてゐた。

『あ、灯が見える。』

彼女は心の底からふりしぼるやうに、苦しく呟いた。風がやはらかに彼女を吹いた。そしてほのかな幻のやうにそこらうかんでゐる景色は、彼女にとつたたとへるものがなく美しかつた。

『あ、もうこの景色も、私に見納めか知れないわねえ。』

彼女はその小石を見た。それにつまづいたことは、故里の母が、彼女にいま一目その搖籃の地を見させる心であつたかも知れないと思つた。

山々は紫色に、煙るやうな姿をあはらしはじめた。さうして丘の縁は、黒くかすんでゐたが、とほくの森はコバルト色にほのめいてゐた。

『愛する者よ、さらば。』

彼女はどこかで讀んだその言葉を思つた。別れて行くその心持、親しいものに離れて行くその悲しさが、しみじみと彼女にかへつて來た。さうしてあくことなく見つめてゐる彼女の瞳がくもつてくると、露がほろりと頬をつたはつて落ちた。

さらばよ、さらば！ ふるさとの峯は

むらさきかすかにあけて行く

風はそよぎ、せゝらぎはうたひ、

小鳥は林に鳴き叫ぶ。

かなたに上る日に向ふて、

わたしはいそぐ、

いざ、故里に別れよう。

それはバイロンの、チャイルド・ハロルドの巡遊の唄に似たひびき、彼女にひびく搖籃の唄の思出は、より更にたましい、あてどない別れの唄に變つて、たゞ涙によつてばかり、心ゆくまで別れを惜しむのであつた。

二足、三足、彼女はとぼとぼとすゝんだ。それからまたふり返へつて、心にさびしく祈つた。

『また、この村に歸つて來られますやうに、そしてその時に、おぢいさまが、私を許して下さるやうに。』

それからまた思つた。

『うちはつぶれてしまふのだわねえ。』

涙があふれるやうに落ちると、彼女は聲をあげてむせび泣いた。それは天と地にも孤獨で生きねばならぬ、生涯のさきがけの苦しい涙であると共に、こぼれやぶれてゆく、すてゝ來た家への、

最後の涙でもあつた。

あたりが明るくなつたので、彼女ははつと氣が付いた。

『汽車に乗りおけると大變だわ。』

彼女はまた小走りに急ぎながら林の角をめぐつて行つた。幾度か涙をぬぐひながら、彼女は先を急いだ。

曉の風が曠野をゆすつて、そこには人影もなかつた。さうしてたゞ一人行く彼女の姿は、はてしない路を行く旅人が、あてのない行手をいそぐにも似てゐた。

とほく汽笛の聲がきこえた。

さうして泣きつゝ、狂ふがやうに、涙の彼女は野のはてに消えて行つた。しづかであるがわびしく、風の音はしめやかに彼女を吹き送つてゐた。

第二部・薊の歌姫

げに、寂しきは、

人の生なりき、

うたがひの心もなく

生れ来て、

われは、いま、

うたがひの心を

悲しく得ぬ。

あゝ、とほき、

なげきの日よ、夢の日よ、

われは知りぬ、

苦しみこそ、

人の生の

さだめなりてふ、

言の葉を。

歌はいづこともなくひゞいてゐた。そして、誰にもなくいつもうたはれた。しかしこの歌が誰によつてはじめてうたはれたか、それを知る人は少なかつた。それははじめに、小さい音楽會で、名も知れない歌ひ手にうたはれたからであつた。

さうしてその名も知れない歌ひ手は、どこに生れ、どこに行き、どこにはてゝしまつたかもわからなかつた。

たゞ誰かゞその名をつたへた。

『薊の歌姫』

ほんの一部の、それもほんとに音楽を愛する人々の話に、その名が時々あらはれたが、それも時が忘れさせた。

『彼女はいゝ聲を持つてゐた。』

『生れながらのソプラノうたひだつたよ。』

『どこに行つてしまつたかなあ。』

『惜しい人が、いつも消えてしまふよ。』

彼等のそんな話もいつか消える頃、「薊の歌姫物語」といふ小さな思出の物語詩が名のある詩人によつてつくられた。たゞその詩人はその書の終りで言つた。

『これはわが悲しき友の物語をそのまゝに記したばかりである。事實はこの書に倍してゐたことは、その友がいつもその物語のはてに、涙をながしてゐたことでわかつてゐる。名もしれず、朽ちて行つた天才の歌姫のために、われはこの詩をうたつた。』

薊の歌姫はそれから世に知られた。そしてその唄はさらにうたはれた。それからある天才の新聞記者の手によつて、新しくその愛の悲しい生活のことがつたへられた。

その詩の物語と、その紙面につたへた記録をたどつて、彼女のことを知るのは、彼女の行方をさぐる前にしなければならぬことである。そこに泉由里子の悲しい愛のたよりがひゞいてゐる。

る。

.....

その時分秋風の吹く頃であつた。郊外高圓寺にさびしい音楽の家をかまへてゐる、かくれた音楽家大木直彦のところに、職業紹介所の手をへて一人の女中が住み込んだ。

『まあ、右の頬にひどいあざがあるんですよ、きみのわるいやうな。』

彼の妻の元子はさう言つてまた笑つた。

『名は薊百合子ですつて、音楽家のところに奉公したいつて、うちへ來たんですよ。』
凡てに無頓着な直彦はたゞ妻と一しよに快活に笑つた。

『さうさ、働いてくれゝばね。』

『さうね、薊でも刺でも、名なんてかまはないわ。』

元子もさうした利欲に淡い音楽家の妻として、夫と氣持のあつてゐるやさしい心掛を持つてゐたから、すぐにその女中の顔のことなど氣にかけないやうになつた。上品ですなほなその女中は、彼女にとつてすぐに必要な對手になつてしまつた。

百合子を見た直彦は、

『なるほど、かはいさうに。』とその心で思つたばかりだつた。

彼はその頃、ある小唄の作曲に耽けつてゐて、新しく来た女中のことなどにかまつてゐられなつかたので、それが音楽家のところをえらんで来たことなどはすぐに忘れてしまつた。そして出来上らないその作曲のために、いらいらと苦しみつゞけてゐた。

妻の元子がある日彼に言つた。

『彼女はまた十六なんですつて、それにしては大きいわね。おかしいのよ、彼女が坊やをねかすつけるとよくねつくの。小さな聲でうたをうたつてねせつけるのよ、可愛い、聲ですわ、まるで雲雀のやうよ。』

『うるさいなあ、お前こそ雲雀のやうによくさへづるねえ。』

直彦はさう言つて笑つた。彼女も夫の毒舌になれてゐたから笑ひながらその傍をはなれた。けれど二三日の後彼女はまたすきを見て夫に告げた。

『彼女はよく泣いてゐるわ。やつぱりあんな顔をしてゐると寂しいのね。それからよく手紙を書

いてゐるわ。どこへ出すのつてきいたら、おぢいさまのところへお詫びの手紙ですつて。彼女は黙つてうちを出て来たらしいのよ。ことによると音楽家にでもなりたくて、出て来たのではなくて、この間、あなたの留守に、お部屋を掃除させたら、一生けんめいに譜本をみてゐたわ。』

『馬鹿だなあ。』

直彦は眉をひそめて笑つた。

『女中なんかするやうな學問のない奴に、どうして音楽家の修業が出来るもんか。』

『いゝえ。』

元子は面白さうに言つた。

『彼女は女學校にでも行つてたらしいわ。だつてこの間私に、先生の御本を拜借して、いゝでせうかつてきくの。どんな本つて言つたら、大田黒さんの音楽夜話をまだ見ませんから借して下さいつて。ほんとにおかしい子ねえ。』

直彦は元子と一しよに笑つてゐたが、少しはその女中に興味をおこした。そしてしばらくしてその妻にたづねた。

『相變らず、音楽夜話を讀んでるか。』

『いゝえ、あれは一晩で讀んでしまつたらしいわ。そして言つてたわ、チャイコフスキーが一番わたしの心持にあつてますつて。そしていまあなたの近代音楽講話を讀んでゐるわ。一度讀まして頂いたけど、故里へおいて來ましたから貸して下さいつて。』

『おどろいたなあ。』

直彦は笑はなかつた。

『よほど熱心だと見えるな。』

彼はさう言つて頭をふつた。彼は音楽が、天才によつてのみ成しとげられるものであることを知つてゐたから、希望のない女中へ、一度はそれを言はねばならぬと思つて、その少女の歩む道のとげられないであらうことを考へてゐた。

一一

秋も末になると、郊外の武藏野は物さびしい風情を増して來た。雑木林が色づいて、枯葉をさ

らさらと落とすと、木枯の風が訪れはじめた。獨歩の詩情をさそつたそれらの風物は、その時代とは變つて來たが、まだひらけはじめたばかりの高圓寺のほとりでは、風の音と共に、秋はやはり武藏野の廣い昔をしのばせた。

畑の青々とつゞいてゐる野道のはて、小高い丘の蔭には、櫟林が空をかぎつて、風に鳴つてゐた。向ふの赤い屋根を見すかす雑木林でも、そこにはやはり武藏野の面影がのこつてゐた。

その一日、百合子は廣い大木の家の前庭を、乳母車をおして子供をねかしつけてゐた。秋は彼女の詩情をさそつた。ねむりついた子供を見つめながら、物さびしいまゝに彼女はなほうたつてゐた。

直彦は自室で作曲に耽けりながら、ふとその聲にきき耳を立てた。彼は自分が苦しんでゐるの

で、幻聴ではないかと思つて、耳を傾けてしづかに眼を上げた。

前庭にさびしく乳母車をおしてゐる彼女が、たしかにそれをうたつてゐた。

『シューベルトだ。』

彼はどうしてその聲をいままできかなかつたのかと思つた。

『いゝ、素適だ。野性だけれど、いゝソプラノの咽喉を持つてゐる。』

彼は恍惚として自分の作曲を忘れた。さうして立ち上ることさへも、彼女の気分をこはすことになるやうに思はれた。彼はいつか、ピアノに身をよせて、その曲をかすかにうち出した。かすかに、それは少しづつ強くなつて行つた。そして彼女の聲もそれに合せるかのやうに少しづつ強くなつた。

曲と唄と二つ、秋風の中にしづかに鳴りひびいて、二つの心は一つのメロディに流れてゐた。

『おゝ』

彼は心に叫んだ。そのリズムが、いかにもなだらかにうたはれたからであつた。

ねむれ、ねむれ、

人いまし、わくご、

母ぎみに、いだかれて、

美しき、うたごゑに、

眠らずや、……………。

彼女はそれを無心に、またくり返へした。それからうたひ終らうとしてはつとした。それは夢のやうにさびしく、自らに酔つて知らなかつたピアノの音が、それに合せてゐることを知つたからであつた。

『おや。』

彼女はわれ知らず顔をあからめた。さうして乳母車をおして逃げて行つた。主人の直彦がいてゐる窓から顔を出した時、彼女は風に吹かれるやうにあはてゝゐた。

その夜直彦はその妻を呼んで、感激の瞳を輝かしながら、そのことを語つた。

『彼女は天才だ。千人、いや、萬人にも一人ゐないめぐまれた人だ。俺は日本にかへつてから、あれだけの聲をきいたことがない。俺はすぐそばに、天才のかくれてゐるのを知らなかつたのだ。』

『まあ。』

元子の顔はよろこびに輝いた。

『彼女がねえ、やつぱりさうでしたわ。私をはじめに發見したのよ。彼女はたしかに教養があ

つたんですわ。それでなくて、どうしてそんなにうたへませう。』

『うむ、教養もよかつたが、あの聲は天稟のものだ。あゝ、私は日本にかへつてはじめてのうれしいことに逢つた気がする。』

百合子はそこに呼ばれた。彼女はおどおどと狼の前に出る小羊のやうにしほれてゐた。彼女は暇を出されるに相違ないと思つた。主人のピアノの音に、自分がうかされて唄を合したと思つてゐた。

けれど彼女は話をきかされて、うれしさと恥づかしさに涙ぐんでしまつた。

『どうして平樂の方にすゝむ氣になつたのだい。』

直彦はやさしくたづねた。

『はゝ。』

彼女はすべてを語らねばならぬと思つた。そして家を出るまでの、さびしく暗い彼女の經歷が語られた。彼女は泣いてそれらのさまざまを二人の耳に入れたが、詩情にふかい直彦とやさしいその妻は涙ぐましくそれをきいたのだつた。

『さうか、Kさんに教はつたのだね。』

直彦は話のあとで言つた。

『あの人なら、私はよく知つてゐる。あの人もいゝ才能を持つてゐる。しかしあなたはそれより上だ。自重しなさいよ。天才でも、磨かなければ珠にはなれないから。』

『はゝ。』

彼女のうれしさはわくわくとふるえてゐるその胸にも溢れてゐた。それは地に埋もれてゐた種子が、春の陽にうたれて芽を出すやうに、輝かしい光を見てゐた。自然は秋であつたが、小春日和のやはらいだ呼吸が、あたゝかく彼女の心に芽ぐんで來た。

『ほんとに、よかつたわねえ。』

元子の言葉が一層彼女を燃えさせた。彼女は二人の足下にひれ伏して、祈るやうに願つた。

『あゝ、うれしうございます。どうぞ、どうぞ、私を教へて下さい。私はどんなに苦しくても勉強いたします。』

『はい。』

市彦は彼女を立てて言った。

「あなたはつましいんだ。その心を忘れなければ、きつと成功する。そしてあなたの藝術のために、私はきつと出来るだけの力をつくして上げる。これからあなたは女中であつてはいけない。私達の友達になつて、苦しみを分け合はう。あなたは小さいけど苦しんで来た。それが實をむすぶことを私達も心から願つてゐるのだよ。」

百合子は感激してたゞ泣きすゝつた。彼女は唇がふるえて、思ふ言葉も外に出せなかつた。しかしそれだけで彼等の心はとけあつてしまつた。新しい光の日が、彼女の心にやつて来た。それは冬の嵐にも耐える、熱い熱い、涙の光であつた。

三

上京して三月、彼女の胸は絶望にくもつてゐた。一月ほどの間、彼女は名ある音楽家の門をたゝいて、毎日のやうに歩いた。しかし誰も彼女に逢ふと、急に冷たさを示した。ある女流聲樂家などはむきつけに言つた。

「やつぱり美しい方でありませんとね。ステージに立つて引立ちませんからねえ」
その人は自らの美しさを誇るやうに、彼女に不快な面持を見せたのであつた。
その間に彼女が家から、それもつぶれて行くその家のために、ほんの入用だけと思つて持ち出して来た四十圓ほどが、夢のやうに消えてなくなつた。

その小さい宿屋の主人は言つた。

「あんたぢやあ、茶屋女も向かないね。職業紹介所に行つたらいゝ口があるかも知れないよ。」
女の陥ちて行く道さへも彼女を容れないことは、あたりまへの女なら侮蔑であつたかも知れなかつた。

「あなたは美しい。」

彼女達はいつもその言葉を待ち設けて、異性の媚を持つことがその本能であつた。そしてその美しさのために、運命に虐げられた時、彼女はかへつて陥ちて行く道をさがすが常であつた。都會はその陥ちをかまへて、純情の處女のそこにかゝるのを待つてゐた。そして一度そこに陥ちたものは、再びそこから上ることは出来ずに、美しくなると同時に、心はいつも下へ下へと下る

のであつた。そうしてすさんだ生活に、その美しさの早くほろびた後、彼女がくやんでも、再び時は彼女達に歸つて來なかつた。彼女達はさうして消えて行くのであつた。

由里子が醜くあるために、その道をとれなかつたことはかへつて幸福であつた。彼女が恥じてゐることのために、彼女はかへつて救はれたのだつた。

職業紹介所で彼女は偶然にも、音楽家の大木の家で女中を求めてゐることをおしへられた。

『なるべく、音楽家のうちへ行きたいと思ひますの。』

主任の女史は親切であつた。それはすぐにさがしてくれた。

『あ、ありましたよ、大木さんてかなり前ドイツから歸つて來られた方のところですよ。ちつとも樂壇には立たれませんが、有名な方ですよ。』

『まあ。』

由里子の心は火のやうに燃え上つた。そしてにじんでくる涙さへおぼえた。大木の名は彼女がK先生に教へられて知つた。

『かくれていらつしやるけどえらい方ですわ。』

彼女はその人の著書の一つを愛讀してゐた。そして心であこがれながら、その人が世の中に出ないで、弟子も碌に取らないことをきゝ知つてゐたので、たづねることを止めてゐたのだつた。

主任の女史は言つてくれた。

『音楽家を志望なさつてるの。せつかく辛棒して成功なさいませよ。』

辛く冷たい人の生にも、さうしたやさしい、砂漠の中のオアシスのやうに、清らかな泉を胸にそゝいでくれる人もあつた。彼女は上京してからはじめてのあたゝかい感謝をそこにさゝげて、涙ぐましくその家をたづねて來たのだつた。

彼女が玄關の扉をたゝいて、音楽修業の願ひをしても、大木は拒んだかも知れなかつた。しかし彼女は裏口からこつそりとその家の入用なものとしてあらはれた。求めてゐたものが拒まれる筈がなかつた。

けれどその家の二ヶ月は、彼女に取つてより更に絶望を感じさせてゐた。

そこにはよりすがらうとしても、あまりにとほく、あまりに深い大木があつた。同じ家にゐながら彼女は少しも顧みられなかつた。彼女は朝おそく起きて、夜おそくねる、主人の大木に、

顔を逢はすことさへ稀であつた。彼女は希望の近くにゐた。しかもその願ひは水の泡のやうに流れて消えてしまふかもわからなかつた。近くあつて、手に取れないその願ひであるからこそ、彼女の絶望の苦しみは烈しかつた。

彼女はいつそ故里に歸らうかと思つた。

そして祖父の良三に向かつて、許しの手紙を幾つか書き送つた。しかし返事は來なかつた。そこではきつと事件がおこり、祖父の良三が忙しい間に、彼女のことを青ざめて怒りつゞけてるに相違なかつた。

『家をほろぼしたのは彼女の父だ。そしてほろびて行く家を救はなかつたのは彼女だ。』

彼女はその怒りを眼に見るやうな気がして、胸がいたくなるのであつた。

夜々はそれを思つてさびしく泣いた。朝は希望にあけるが、いつかなへられるかもわからないそれを思ふと、彼女は働きの間にも涙ぐましくなるのであつた。

彼女にとつて、秋の短い日のすぎで行くのは、矢のやうに早く思はれた。また苦しみつゞけ、悲しんでゐる一日は、非常に長く思はれた。

「悲しみの日は長い。」

詩人ヴェルレエヌのうたつたその言葉はほんとであつた。

さうしたさびしい三月の後に、彼女の苦しみはよりすがる手を得たのだ。そのよろこびは大きく、よろこびの涙はあたゝかであつた。彼女はその日から生甲斐のある自分を見出した。

四

木枯の音が高くなりまさる頃、そして冬が武蔵野の曠原に近づいて來た時分、大木の家には新しい女中がふえた。そして彼の妻の元子が言つた。

『蕪さん、あなたは家の方のことはいゝのよ、しつかり勉強してね。』

蕪百合子、彼女は自からさう名のつた。

それは昔の日を記念する、自分のさびしい心からであつた。『私は人並ではないのだ。私は人に憎まれる、女としての不具なのだわ。蕪でいゝ、誰にも愛されずに、一生をさびしく一人で送らう。』

彼女は自分に對する奥さんの心づくしに涙をながした。

『いゝえ、奥さま、私はいつまでも女中において下さい。そして暇のある時に勉強させて下さい。』

『いゝえ、駄目よ。』

理解のあるその妻はほゝゑんだ。

『音楽は必死のものですわ。少しの時間でもすてゝはなりませんの。ね、あなたは、これから音楽に生きるのよ。外のものはみんな、悲しみも苦しみも、忘れてしまはなくては駄目よ。もつと遠慮しないで、自分の道をすゝみなさう。』

けれど彼女に悲しみは多かつた。めぐまれた才能はのびて行つた。それは若芽のやうにおそろしい未來を思はせた。その間に、大木の代りにその妻が書いてくれた手紙の返事が彼女の祖父の良三から來たのだ。

孫由里子儀さまさまお世話に相成り萬感謝まかり在る。されど彼女儀は先祖傳來の家の大

事をすて、出奔いたしたる者にて、家名を汚し、祖父を辱しめたる者、老生に於ては彼女の身上に就きては、一切をすて、關知せざる儀に御座候へば、宜しく御所置なし下され度く、かゝる不義理をなす者なれば、貴殿にも御迷惑相掛け申し候ことあれば、直ちに御放逐相成り度く、本人身上に就きては老生憤怒止みがたなくこれある趣御申しきけ相成り度候。

二伸、なほ金田のため、年來の家産を奪はれ、老生には恥辱を忍んで、隣村の茅屋に移り申候こと、他事ながら彼女に申しそへ度く御配慮のほど願上申し候。

雷雨のしとしと降る夜、直彦とその妻と彼女とはその手紙をかこんで、互にさびしい眼を見交した。

『困るわねえ。』

その妻の言葉を直彦が引き取つた。

『しかたがないことだ。これは新しい生命にすゝまうとするものにあたへられる試練なのだ。古い家は破れて、そこから新しい芽がふくのだ。菊さんが家族制度の犠牲にならなかつたのはわ

るいことではない。おぢいさまにだつて、いまに酬(むく)いる方法(ほうほう)がある。ねえ、勉強(べんきやう)することだ。一切(いっけい)を忘れなさい。そして自分の天才(てんさい)をのばして、生(うま)れて來(き)た使命(しめい)に生(い)きなさい。』

『はう。』

彼女は涙(なみだ)の中に光(ひかり)を見た。苦(くる)しみと悲(かな)しみのどん底(そこ)に、大(おほ)きな光(ひかり)を見出(みいだ)した。

しかし彼女はやはり女(おんな)であつた。それもまだ年(とし)のゆかない、少女(せうじよ)にすぎなかつた。彼女の心(こころ)は小さな破(やぶ)れた家(うち)に、青(あお)ざめてゐる祖父(そふ)の良三(りやうざう)と、そのそばに小(こ)さくちよけてゐる弟(せとうと)の太刀雄(たちを)を夢(ゆめ)のやうに畫(え)いた。

そしてそれを取り巻(ま)いてゐる人生(じんせい)が、どんなに憎(にく)らしくうつたか? 『どうにもならないのねえ。』

彼女の母(はは)の魂(たましひ)に向(むか)つて、救(すく)ひの祈(いの)りをねがつた。

『どうぞ、どうぞ、私の成功(せいこう)するまで、おぢいさまがたつしやでゐらつしやるやうに。』

これがとりつくしまもない、彼女(かのぢよ)の心(こころ)の最後の願(ねが)ひであつた。

その夜(よ)氷雨(ひめ)そぼふる深夜(しんや)を、彼女(かのぢよ)は一人(ひとり)になつて泣(な)きつとけた。彼女(かのぢよ)が、いよいよ直彦(なほひこ)の手(て)につ

いて、ほんとに練習(れんしゆ)しはじめてから、音楽家(おんがくか)として立ち上(あ)がるまで、どの位(くらゐ)の年月(ねんげつ)を苦(くる)しまねばならぬといふことが、はつきりわかつて來(き)た。

ほんの發音(はつおん)の最初(さいしよ)から彼女(かのぢよ)はならひ變(か)へねばならなかつた。

『英語(えいご)ばかりでは駄目(だめ)だ。伊太利(イタリイ)を少し(すこ)でもやらなくては 私(わたし)は凡(すべ)てを日本語(にほんご)でうたふ理想(りきさう)を持つてゐるが。』

直彦(なほひこ)はさう言(い)つて、彼女(かのぢよ)の教養(カウチユア)の足りないことをいませめた。

『十年(じゅうねん)だ、十年(じゅうねん)やらなくては。』

それも直彦(なほひこ)の彼女(かのぢよ)をばげます言葉(ことば)であつた。

未來(みらい)はとほく、いま光(ひかり)はあつても、まだよろこびはなかつた。彼女(かのぢよ)はそれを考(かん)へて、さびしい悲(かな)しさに泣(な)きつとけた。

『いつになつておぢいさまに許(ゆる)して頂(いた)げるか。』

彼女はそれを思(おも)つて、たよりない未來(みらい)をたよるより外(ほか)ないことをさすると、やはり悲(かな)しいのであつた。

その翌日、彼女の聲の亂れてゐるのを知つて、直彦が聲をあらうけた。
『昨夜眠らなかつたね。』

『えー。』

『音楽家にとつては第一に眠り、第二に心の安静だ。少しばかりのことに心を亂すやうでは、修業は出来ない。もつともつと、しつかりしなくては駄目ですぞ。』

『は？』

熱情の多いだけに、直彦の教へはきびしかつた。やさしいその心も、一步音楽の精進に這入ると、まるで火のやうに變つた。

出来のいい時にほゝゑんでくれる彼も、出来のわるい時には雷のやうに荒々しくなつて、毒舌をはき出すのであつた。

ピアノの練習がすまないと、彼女はひどく肩をうたれた。

『ワン、ツウ、スリー、そら、駄目だ。それちや水がながれてるんでなくて、泥溝に鼠がおどつてるやうだ。風の音はさはやかなのに、あなたの弾き方はまるで狼がとほ吠えしてるやうだ。』

聲樂の練習をきいて貰ふと言つた。

『なあんだい。猫がうたつてるやうだね。』

『それちやあ、月がうかんで来るやはらかさをうたつてるやうぢやないね。よつばらひが足をひきづつてるのをうたつてるやうだ。』

『ふうん、それが歌かい。そりやあ、さかりのついた犬の聲だ。』

その毒舌を自分をはげましてくれるのかと思へば、彼女は自分に對するくやしさとその人の熱情に泣かねばならなかつた。しかし練習最中に彼女が涙ぐみでもしようなら、直彦の疝癪は破烈した。

『君はお姫さまかい。それとも田舎役者かい。泣くなんて、舞臺で女優のすることつた。さあ、笑つて、笑つて。メロディは笑つてるんだぜ。』

冬が来て、それもすぎた。春、夏、秋、またそれがめぐつて来た。銀鈴のやうに、彼女の聲がみがかれて来た。それは武藏野の風よりも高く、廣々と野原にながれて行つた。虫の聲よりも涼しい、近くの家々の軒にたゞよつて、空高く消えて行つた。

唄は一瞬の情熱であるけれども、一瞬こそ、そして消えてゆくものこそ、藝術の最上のもとして、はかないだけにまた大きな力を持つてゐた。

五

百合子の十八の正月が来た。野に咲く薊の花も時がくれば美しく咲きほころびた。彼女はいつか一人の處女として、時を待つ、やはらかい青春をめぐまれた。しかしその青春も、彼女にはほほゑんでくれなかつた。

鏡をみつめて、ぞつと自分に青さめる處女！ それは哀れな彼女の生れつきが、冷く彼女の胸をひやしたのだつた。

『あゝ。』

鏡は彼女を絶望させた。唄に恍惚としてよつてゐる切那、時として彼女の胸に、嵐のやうなそれが来た。

『恥づかしいわ、私。 どうして多勢の人の前でうたへやう。』

彼女は氷のやうなつめたさにふるえて、まるで火のやうに熱くなつた胸を抱いた。『どうなるのだらう、私は。 どうしたらいいのだらう、私は。』

彼女はステイヂに立つて、嘲笑される自分を幻のやうに見た。がしかしそれと一しよに、唄にきゝむせんでゐる人々の姿も見た。

『いゝのだわ、姿なんかかまやあしないわ。ほんとのものを、さうだわ、それに生きなくては。』
彼女はさう呟いて自分の心をおししづめてゐた。

正月の半ば過ぎのことであつた。彼女が練習を終つて思ひ沈んでゐると、直彦が來客の青年を連れて來て紹介した。

『薊さんだ。それから薊さん、この方は音樂學校の青年教授の田内春雄君、元私のところにもた、すばらしいピアニストです。』

『先生。』

音樂家としては少し朴實に見える春雄は顔をあからめた。

『よして下さい。僕はまだこれから勉強しなければならぬ青二才です。』

『まあ、さうね。』

直彦は笑つた。それから百合子に言つた。

『一つ、なにか田内君にきかしてやつて下さる。』

『まあ。』

彼女はおどろいて瞳を見はつた。春雄は彼女の醜い半面を見のがさなかつたが、美しく燃えてゐる彼女の瞳の底の純な心もすぐ見ぬいた。

『心の奇麗な人だ。』

彼はたゞさう思つた。そしてその唄についてはなんにも知らないで輕蔑した。『どうせ、少女だ。碌なうたひ方もしないだらう。それにみすぼらしい姿をしてゐる。』

彼は日本でも有数の金持の一家の若い主人であつた。その趣味の深いために、一家の人々の排斥を拒んで、自ら音楽家として立つやうになつた。そして今では一家の他の人々から批難されながらも、それが黙認の形になつてゐるのだつた。

彼が音楽學校の教授といふ公職についたのも、いくらかはその背景の力の助けがあつたからで

あつた。けれど彼は深い理解と、新しい未來をたしかにしつかりと持つてゐる青年音楽家の一人で、たとへその背景がなくとも、相當に世に出て行くに相違ない實力は持つてゐた。

『きかして下さる。』

彼は直彦に對する義理でさう言つた。直彦がなんのために、こんな見すぼらしい少女のつまりない唄を、自分にきかせるのだから、彼には迷惑に思はれた。

直彦は笑つてゐた。

『菊さん、心配することはない。一つ、うたつて下さい。なにがよいかな、さうだ、ベートホーフエンのカルパニの詩があつたね。日本語がいゝ、照井榮三君の譯がある。』

彼は自分で譜本を取つて、それを彼女に持たせた。そして春雄をかへりみた。

『君、軽く伴奏してやつてくれ。』

春雄はつまらないことになつたと思つたが、否むわけに行かなかつた。そして彼はピアノをひらいて、すぐにそのキイを無造作にうち出した。

ためらつてゐた百合子も、もう逃がれることは出来なかつた。聲はすぐに起つた。直彦は満足

したやうに、ソファによるとゆつくりと足をのばして、葉巻の火をつけた。

この暗き墓に、

われをいこはせよ、

彼女の聲は暗くなくひびいた。

『おー。』

ピアノを軽くうつてゐた春雄は、そのうたひはじめからきつと身をひきしめられるやうに感じた。

その聲は、そしてその節調は、少しの汚れもふくまず、しづかな中にふくらみを持つてすんだ。彼のピアノをうつ手は、自ら感激にふるえて、そのリズムに歩調をびたりと合せた。

われ世にありし日、

なれにまことあらざりしに。

この暗き影を、

安らかにせよ、

なが涙もて、

わが土をぬらすなよ。

春雄は涙ぐましい氣がした。悲壯だと思つた。それからあたゝかいものが胸にわいて、恍惚として凡てを忘れた。曲はいたましく、唄は悲しかつたが、彼はわれ知らず弾きつづけた。

おーこの暗き墓に、

われをいこはせよ、

われ世にありし日、

なれにまことあらざりしに、

あらざりしに。

唄のひときと共に曲も終つてゐた。そして春雄はなほその餘韻にきゝ入るがやうに、ぢいつとうごかなかつた。その聲は地上のものを越えて、天上から、おそらく女神がうたつたやうに思はれた。

彼は卒然として立ち上つて、すぐに百合子の手をにぎりしめた。

「あなたは、あなたは、女神だ。神さまの地上に下した聲だ。」

「あ。」

百合子はあまり強く手をにぎられたので眉をひそめた。しかし彼女のうるんだ瞳は、春雄の情熱に燃えた瞳を見のがさなかつた。

「あ、失禮。」

春雄は氣づいて手をはなした。

「うゝえ。」

二人は互に顔を赤らめあつた。唄の力が持つて來たふしぎの力が、二人の胸をつよくあたゝかく吹きとほつた。さうしてそれは愛と言はれないまでも、胸と胸とを結びつける感情のやはらかな理解であつた。

六

直彦が急に笑ひ出したので、二人は恥づかしさうに離れて椅子についた。

直彦が笑ひつゞけて言つた。

「どうだ、田内君、カルバニの詩はいゝだらう。」

「うゝえ。」

春雄はその寒い時分にハンケチで額をぬぐつた。

「素適です。先生の教法がよかつたのでせうけれど、こんな聲の人は日本人にはありません。竹岡鶴代さんをより繊細にしたやうな情緒をうかばせます。」

直彦はまた笑つた。

「教へ方ぢやあないさ。天稟の力だよ。天才でなくては持たないものを薊さんは持つてゐるんだ。」

「さうです、ほんとにさうです。」

春雄はうなづいて打ち沈んだ。

「天才はなに物よりも強い力ですなえ。」

彼はおどろきにうたれて、心の動搖をおさへることの出來ないやうに思はれた。

百合子はうなだれてゐた。自分がみとめられたことはうれしいけど、それがまたおそろしいやうな気がした。彼女はすぐに立たうとした。

直彦がそれをおし止めた。

「ちよつと。實はね、田内君。」

彼は春雄に向つて、緊張した調子で相談を持ちかけた。百合子はまた腰をおろして、恥づかしうなだれてしまつた。

「僕は君にたのみたいことがあるんだよ。菊さんはいま僕の家にかう言つちやあ失禮だが、厄介になつてるんだ。聲の方の教養はかなりすゝんだが、とにかく語學の方をもすこしつきつめてやらしたい。ところで僕も見られるとほりの貧乏に甘んじてゐるんで、學費の出どころがないだ。」

彼は率直にその頭をかいて笑つた。

「それで妻君にも相談したんだがね。どうも女の方が智恵があるよ。それは君が金持だし、有り餘つてる。といつては申譯ないが、少し位のことでは不自由ないんだからといふ譯さ。つま

り今日君に来て貰つたのも、それなんだよ。菊さんの實質を知つて貰つて、君がそれを認めたらなら、いくらかでも菊さんに、いや、音楽に生きてゐる我々として、その天分のために、君の理解ある補助をしてやつて貰へまいかと言ふんだ。」

「先生。」

春雄は感激して叫んだ。

「僕は先生をうらみませすよ。そんなことをどうして相談なさるのです。相談なんかしないで命令して下さい。僕は先生がみとめた方なら、どんな助力をしてもいゝんです。」

「ありがたう。」

直彦も興奮した。

「君の心づくしは有り難い。どうかさうしてくれたまへ。」

「いゝですとも、どの位、さしあたり毎月百圓位つゝでも……。」

「戲談言つちやいけない。そんなにはいらぬよ。修業中は貧乏がいゝのだ。いや藝術家は一生貧乏の方がいゝかも知れない。といふと君なんてその條件になつてゐないがね。」

直彦はほゝえんだが、春雄はそれに熱中してゐた。

『といふほどの位』

『さあ。』

直彦は百合子を見かへつた。

『どうです、薊さん。田内君は心よく承知してくれましたが、どの位要りますね。さしあたり小づかひと語學の方の勉強と、譜本も新しいのを手に入れたいだらうし、五十圓をねえ。』

彼女は恩師の心づかひと春雄の温情に對して涙に浸たるやうな氣持になつてゐたが、にはかに呟くやうに言つた。

『いゝえ、先生。私、そんな、そんなこと、どうして頂けませう。』

直彦がたづねた。

『ではどうするんです。』

『私、仕事を探して、そして……。』

直彦が笑つた。

『薊さん、そんなことが出来るものですか、それは夢ですよ。音楽は永久の修業ですよ。そして金持は、いはゞさうした寶物のやうな天才には、補助をする義務があるんです。そしてあなたには貰ふ権利がある。いまの階級闘争の方からでも言へば、あなたは奪つていゝ力を持つてゐる。』

『さうですよ、薊さん。』

春雄もほゝえんで言つた。

『親ゆづりの財産のほんの少しの利益のわけまへをして補助もおこがましいが、私はあなたにならよろこんで奪はれますよ。そして音楽の正道に立つて、大いに戦つて貰ひたいのです。私からいへば、あなたはうける義務があると認めますねえ。』

『許して下さい。』

百合子は誰にもなく叫んだ。

『私、よろこんで田内さんから補助して頂きますわ。私はなんにもわからないのです。けれどきつと勉強して、出来るだけ一生けんめいになりますから。』

『さうして下さい。僕はあなたのやうな人が、日本に生れたのがうれしいのです。』

百合子の瞳から熱い涙がほろりとこぼれた。そして春雄の若々しい瞳は輝いてゐた。直彦は満足さうにうなづいた。

『凡てはこれからだ。あなたは力を持つてゐる。その上にうしろだてを得た。これからもつと深い力を得て、大いにこの道のために盡くして下さい。』

七

「天才といふものは生れながらの狂人である。」といふロンブゾウの言葉は正しいかも知れないが、「生れた天才は伸びるものである。」とも言へることであつた。百合子はたしかに翼を得たものゝやうに、それから飛躍をした。

一流の音楽家に認められたといふことが、彼女を上げまし、不自由なく生きてゆけることが、更に彼女を力づけてゐた。

直彦ですら、その伸びてゆく芽の大きなことに、かへつておどろかさされ、自分の力の足りないことをいたく感ずる位であつた。しかも彼ははりつめた彼女をなほよく生かすがために、決して

彼女をほめたゝへなかつた。

『また、ラツパをやつてますね。』

彼は彼女のあらばかりを探して毒舌をわざとあびせた。彼女はまたそのためにみがくだけ、完成の方に近づいて行つた。

一流の音楽會で彼女をたのみに來た。彼女は出たいやうにも思つた。しかし直彦は彼女を引き止めた。

『自重なさいよ。』

彼女はそれを斷つた。さうしてなほ自分の力をますために練習をつづけた。

田内春雄はその時分よく訪れて來て、彼女の練習にきゝ惚れた。時としては彼女のために伴奏をしてくれた。彼はどちらかと言へば服装などには無頓着な、物にかまはない方で、一面から見ると粗野にさへ思はれる程のところを持つてゐたが、ほんとは感情の新しい、非常にまじめなところを持つてゐる情熱の強い性格であつた。

彼の母は早く死んだが、名門の出で、彼にはその母からつたへられた高貴な容貌と、事業肌の

亡父からうけた奔放な天分とを持つてゐて、まだ二十七才の反撥性の強い年頃であつた。そして父の死後家門のために制せられて、なにかと自由にならないので、彼の心は幾分陰鬱にさへ傾いてゐた。

彼は百合子の天分、その豊かな才能に惹かれた。

彼はその醜い少女が、自分を魅してゐるのに気が付くと、自分を制してなるべく彼女に逢ふまいとしはじめた。しかし純な彼は、なにともしれない苦しみ、自分が喘いでゐるものが、たゞ百合子の唄によつてばかり癒やされるのを知ると、自分の心に言つた。

「僕はこの人に魅せられてゐるのではない。あの人の天分を育てようとしてゐるのだ。」

彼は自分でさう信じて、彼女をたづねることがそのためであると決定した。それからなにか見えない綱に惹かれるやうに、大木の家を訪問の度敷を段々に多くした。彼は彼女の唄に接してゐるさへすれば、快活な兄のやうに、少しの焦燥も感じないのであつた。

彼女は彼を無邪氣に、自分を助力してくれてゐる人としてよろこんで迎へた。彼女も春雄が来てくれると、なにかあたゝかい空気を感じた。

「あの方がよい方だからだわ。」

彼女はそれをさう解釋した。

「あの方のことを考へるだけでも罰があたるわ。」

彼女はまたさう考へた。

自分の醜さを知つてゐる彼女は、たゞ音楽にのみ生きようとして、それをしか考へなくてはならないと思つた。その外のことには少しも心の惹かれることは、自分の考へが足りないのだと思ふと、時としてあらはれる春雄の幻をけんめいにうち消して、ひたすらに練習をつとけてゐた。その幻は彼女のやるせない時に表はれ、故郷の老祖父や弟を思ふ時にあらはれた。さうして悲しんでゐる彼女に、その手をさしのべてなぐさめてくれるやうであつた。

「春雄兄さま。」

彼女はそんな時、彼をそつとさう呼んでみた。

「まあ、勿體ない。」

彼女はすぐそれをうち消したが、その呼び方はたやすく口になれてしまつた。さうしてそこに

彼が彼女になれてくるに従つて、彼女の胸が度々その名を呼ぶやうになつて行つた。

彼女はねる前に床に座つていふのだ。

「春雄兄さま、お休みなさいませ。」

「まあおかしいわ。」彼女はくつくつと笑ひ出してしまつて、頬がほてるやうに感じたが、なれるとかへつて寂しいほどに、彼のことが思ひ出された。

「春雄兄さま、私悲しくてよ。」

彼女はいつかその幻の人物と話をはじめることにさへなつてしまつた。彼女はなにかにかこつけて、その幻を呼び出して來た。

「私、泣きたいのよ。でも春雄兄さま、私泣きませんわ。なぜつて、私あそこの三節目がうたへないの。今日も先生に吐られてよ。先生はひどいわ。私のことを蛙がないてるやうにうたふつて。ねえ、それで私、ほんとに悲しかったの。」

時として彼女は思つた。

「私あの方を愛してゐるのかしら。」

彼女はふるえ上つた。「なにを言つてるの、そんなこと、いゝえ、そんなこと、私は、私は音楽を愛してゐるのよ。」

彼女はそれから寂しくうなだれて、悲しい思ひに浸ることがあつた。長い間、彼女はなにかを一心に思ひつめていつか涙が頬をながれてゐた。

彼女ははつとしてよみがへつた。

「まあ。」

彼女の考へは彼が二三日見えないことを、まるで夢のやうに問答してゐたのであつた。

「なぜだろ。」

「お忙しくて來られないんですよ。」

「いゝえ、昨日は日曜よ。」

「御病氣なのよ、きつと。」

「あれ、どうしたらいいでしょ。」

「お手紙あげたらいいわ。」

「でも、變だわ。」

「先生にきいてみなさいよ。」

「いや、そんなこと。」

「なんでもないぢやないの。先生は昨日音楽會をきゝに行かれたから、きつと逢つていらつしやうたわ。」

「でもいやだわ。」

「どうして。」

「恥づかしいわ。」

「まあ、おかしな人ねえ。」

「いゝわよ。」

「よくはないわ。」

「私、なんだか寂しくなつて來たの。泣きたいやうよ。」

「私も、私も、あゝ私もよ。」

そこで彼女は自分が涙をながしてゐるのに氣が付いて、わるいことでもしたやうに、うなだれるのだつた。彼女は自分を補助してくれてる尊い春雄を、自分の近くにおいて、冒瀆してゐるやうに感じた。さうして心から涙をながしてあやまるのだつた。

「許して下さいませ。わ、私は、醜い女ですわ。」

その時ほど、彼女がさびしいことはなかつた。彼とのとほいへだたり、それをはずきり感ずることが、寶物をうばはれたやうな悲しさであつた。彼女はそれを思つて泣きつゞけて、いつか涙のうちに眠りにつくことが多くなつて行つた。

八

春が來て、それがすぎ去つて行つた。百合子はその春のはじめから、時々音楽會にきゝに行くことを、直彦に許された。彼女はいつも直彦に連れられて行くが、人目に立たないやうに、そつと後の方の席にかくれるのだつた。直彦の周圍に集つて來るその道の人達を彼女はおそれとほくはなれてゐた。

五月の末にオーケストラ・シムホニーの催しがあつた。彼女はそれに行くことを願つて許された。

『僕が行けないよ。』

直彦はさう言つて笑ひながらたづねた。

『ひとりで行けますか。』

彼女は不安な氣がして黙つてしまつた。それは彼女にとつてはじめての青山會館で行はれるのであつた。彼女は一人で行くことを躊躇しなければならなかつた。

『お嬢さんで困るねえ。』

直彦はさう言つて、春雄が行くであらうから一しよに連れて行つて貰ふやうに電話をかけたらいゝと笑ふのであつた。

『まあ、だつて變ですわ。』

彼女は止めることにした。それでも行きたくてたまらなかつたがあきらめてゐた。その日の晝ごろ、突然春雄が訪れて來た。

『一寸と、家の方の親類に病人で、こちらの別荘を見舞つたものですから。たぶん先生が、今日の青山會館のシムホニーに行かれると思ふので、御一しよにときめ込んでお寄りしたのです。』

『さう、それはよかつた。』

直彦は作曲の手つだひをしてゐた百合子を見返へつた。

『今日は夕方から來客があるんで、僕は出かけられないが、薊さんが行きたがつてるんで、連れてつてくれたまへ。お嬢さんで、一人ではいやだつて恥づかしがつてるんだ。』

『まあ。』

百合子はうらめしげに直彦を見つめてうなだれた。

『はゝ。』

直彦は快活に笑つた。

『すつばぬかれたんで恥づかしがつてるね。行つてくるといゝ、田内君が一しよに行つてくれれば、こんな氣が強いことはない。』

『どうぞ。』

彼女はそれにしたがった。午後からのと、夜の、両方きいた曲があつたので、彼女は急いで出た。彼女は春雄と肩をならべて行くことが恥づかしい気がした。自分よりか、春雄に毒なやうな、それでゐてなにやらうれしかつた。

春雄にとつて、それは思ひがけないことであつたが、彼は百合子がその姿のために、道ゆく人々に顔を見られて、ふりかへられたりするの、氣の毒でたまらなかつた。『これほどの天才が、まだ世に知られないために、』と思ふと、彼女のために大聲でどなつてやりたい気がした。

二人はつゝましく黙つて歩いた。彼等は互になにか知らぬ恥づかしさを感じあつてゐた。

明るい陽の下で百合子を見て、春雄はたとへ顔に大きな傷があるとしても、彼女は上品な姿を持つてゐると思つた。

『バラソルを持つて来ないんですか。』

春雄が氣が付いてたづねた。

『私、持つてゐませんの。』

もしそれで顔をかくしたらと思つてたづねたのだが、彼はそのこたへにあはてた。そしてまた

へまなことをいつた。

『買つて上げませうか。』

『いゝえ、なくてもすみますわ。』

上品な紳士の傍を、みすぼらしい装の自分がついて歩いてゐるのはわるい、傘も持たないで、と思ふと彼女は悲しかつた。『いゝえ、いゝの、いゝの、私は音楽に生きる人だわ。』彼女は自分の胸にさう言ひきかせたが、心でそれをはつきり承知しなかつた。

『やつぱりなくてはいけないわ。』

彼女はおそろしい企てをしてゐるやうに、その心の決定をきいてぞつとした。

……彼はやつぱりその時、

その洋傘を買ふことを決心した、

なくともすむ、その心は悲壯だ、

事實、かの女はさう答へて、

悲しくうつむいてしまつた、

僕は彼女の天才を愛してゐる、

しかし彼女の天才と、

彼女とは一體のものである、

僕は彼女を愛してゐる、

例へ彼女が僕を愛してゐないにしろ、

僕は彼女を愛さう、

そしてもし彼女の愛が許してくれるなら、

二人は、結婚まで行かねばならない、

彼はそこまで考へて愕然とした、

結婚！ その言葉が、

そこに連れ立つてゐる彼女の、

美しい方の半面に畫かれた、

しかし醜い半面に向つて、

彼は悲しく身をゆすつた、

内心が言つた、

そこに彼女がゐる、

醜い半面こそ、

お前の結婚の犠牲ではないか、

彼ははつきりと呟いた、

「私は彼女の凡てを、

凡てを愛しなくてはならない、

悲しみをも、苦しみをも、

共に愛し、共に苦しむのだ。」

……物語詩の詩人はさううたつた。それは春雄自らの告白であるとするれば、彼が彼女を愛する
ために、そこに新しい道を開いたことがわかるのだつた。春雄はその時はじめて、自分の愛のす
べてを理解して、凡てを彼女にうち明けようと決心した。

音楽會に行つてから、彼女はいつものやうに、うしろの方に席を求めて、春雄からかくれて行かうとした。しかし春雄は黙つてついて行つて、その傍に席を占めた。二人はあたゝかい膝をすりよせてゐた。

誰か後を見かへつて春雄をみとめると禮をした。そして春雄がその隣りの彼女に話しかけるのを見て、自分の隣の人にこつそり耳うちした。それらは美しい女性であつたが、春雄はたゞ自分が恥づかしく顔をそめたばかりであつた。彼は愛する彼女の傍に、さうてゐられることを幸福に感じた。

『僕の愛人は天才だ。』

彼はそれを胸の中で叫んだ。それは彼が求めてゐる自由な感情の凱歌であつた。彼は曲目の進行中もたゞ彼女の存在を知つてゐるばかりであつた。

軽い夕食を彼等はそこの食堂で隣あつてすませた。どこからか嘲笑の目が、彼等をめざしてゐた。

彼女は彼のためにそれを恥ぢた。

彼はしかしそれに反抗して、彼女から話の糸口を得るやうにとめてゐた。彼等の心は少しづつ、かたいいましましめからとけて行つた。恥かしさを越えて、彼女はうれしく彼の言葉をきいた。夜の歸りに、彼は自働車を邸から呼んだ。そして斷る彼女を、新宿まで送ることにきめてしまつた。

『御迷惑ですか。』

『いえ。』

彼女は耳までもほてらせた。

自働車の中で、春雄は幾度か唇をひらかうとしてためらつた。しかもそれがかへつて、もどかしく二人を沈黙させる種となつた。それはいつか早く新宿の通りを走つてゐた。

春雄はうちふるえる唇を、勇氣を起してひらいた。

『あの、菊さん。』

『え。』

彼女は耳をかたむけて、やはり異常なショックにうたれながら、瞳をふせてゐた。

『僕、僕、近く、あなたによく、さうです、よく話したいことがあるんです。き、きいてくれませんか。』

『は、どうぞ。』

『い、い、ですか。』

春雄の手がのびて素早く彼女の手をつかんでかたくにぎりしめた。

『あ。』

彼女は火の近くにゐるやうに、赤くなつてあはてた。それから彼が手をはなした時、青ざめてふるえてゐた。

自働車が止まつた。

『許して下さい、そしていつか近い中に。』

『ひも。』

彼女の哀願するやうな瞳は、それを拒みながら、拒み得ないことを示してゐた。彼は立ち上りながら言つた。

『あした行きます、朝。』

『……………』

彼女は夢のやうにうなづいて降りた。彼が送つて行かうとしたけれど、彼はそこに立ち止まつてゐた。

『どうぞ。』

『でも。』

『いゝえ。』

彼の方がそれにまけた。そして燃えるやうな瞳を彼女になげつけて、彼は自働車の中の人となつた。彼は中からまた口早に言つた。

『あした、朝。』

自働車が去るのを彼女は夢のやうに見送つて、ちつとうなだれた。胸の血はまるでわくやうに煮え立つて、涙があふれて來た。彼女はさうしてとほとほと構内に這入りながら、自分がどんなに深く春雄を愛してゐるかを知つた。

『まあ、あの方が私を。』

彼女はおどろくやうにさう呟きながら、心では甘い法悦に酔つて、よろよろと身も傾くやうな気がした。

九

その夜彼女が夜明け方まで、眠らずにゐたのは無理のないことであつた。彼は夢のやうなよろこびから、苦い酒を少しづつ、かもし出してゐた。

『あの方が愛して下さつても、私はそれに相當しないものだわ。私が、私が、あの方の愛を受け入れるなんて、そんな大それたことを……。』

彼女がいつか涙に濡れながら、夜明け方になつて得たのは、さびしいあきらめであつた。彼女は泣きながら心にそれをさゝやいた。

『あの方を私が愛してゐるなら、あの方の生涯を、恥づかしくさせてはならないわ。あの方の家を汚したり、あの方を一家の人達からわるく思はせたり、それはいけないことだわねえ。』

彼女のあきらめはなほ悲しく呟いた。

『私は、一生孤獨よ、音楽と一しよに死ぬんだわ。母さんの言つたやうに一人で。』

彼女は泣きながら曉をさむしく眠つた。その頬になほ涙がながれて、枕をうるほしてゐたが、彼女はうとうと夢の中でも泣きつゞけてゐたのであつた。それは愛する者の愛してくれることを、拒むための悲しい涙であつた。

朝いつもよりかねすごした彼女が、起き上つてみじまひをしてゐる時、元子が彼女のところに來た。

『おそかつたわね。あら、あなた青い顔をして、どうかしたんぢやない。』

彼女はさびしくほゝえんだ。

『いゝえ、なんでもありませんわ。』

『でもまつ蒼よ。』

彼女はさう言はれて鏡をのぞき込んだが、顔色より先に、おそろしいあざが腫らうつた。『あ。』

彼女はそこにつつぷしてしまった。

『まあ、どうしたの。』

元子はすりよつてたづねた。

『私。』

彼女は顔をあげると苦しげに呟いた。

『私、もう、だめです。の、呪はれてゐるんですから。』

『まあ、しつかりなさいよ。』

元子が彼女を叱つた。

『そんな、そんなにくちなしでどうするの。今朝はどうかしてゐるわ。ほんとに気が弱いわ。そんなことで気をめいらしてしまふなんて馬鹿らしいこつたわ。姿なんか第二の問題よ。』

『え。』

彼女はその言葉にやつとうなづいた。しかし心ではそれをそのとほりに考へることは出来なかつた。『やつぱり、私は不幸なんだわ、呪はれてゐるんだわ。あゝ、天才とうたはれなくてもい

い、せめて、せめて、人並に生まれたかつたわねえ。』

いつはらない彼女の望みは、それを思つてゐた。そしてそれは生まれ變つて来ないかぎり、とげられない望みであつた。

『ほんとに、しつかりして下さいね、いま気が挫けたら、良夫の骨折りもなんにもならなくなつてしまうんですわ。』

『すみません。』

彼女は元子の言葉に、青白い頬をあげてさうこたへねばならなかつた。

その時、直彦が呼んだ。

『お客さまだぜ。』

『まあ、朝つから誰でしょ。』

元子はさう言つて立つて行つた。百合子にはそれが誰であるかわかつてゐた。彼女は裁きの庭に引き出される罪人のやうにふるえてゐた。なにともしへぬさびしさが、さはぐ胸の波の底に、祈るやうに小さくなやんでゐた。

しばらくして元子が来た。

「薊さん、田内さんよ、なんだかおめにかゝりたいことがあるんですつて。」

「でもわたし。」

百合子は赤くなり青くなつた。

「今日はおめにかゝりたくないんですの。」

「あら、なにをそんなにあはてゝゐるの。まさか田内さん、あなたを取つて喰ひもしませんわよ。いつものやうに練習していただいたらいゝわ。」

「えー。」

春雄に逢ふことを避けられないものであることは、彼女にわかつてゐた。しかし逢つて、たとへばそれが愛の告白であるにしろ、それをしりぞけることは、決心してゐても耐えられない寂しさであつた。彼が愛してくれてゐるのなら、それをそのまま胸に秘めて、黙つてしまつておきたかつた。

「逢はない方がいゝ。」

彼女はさう心で思つた。しかしその人は夜々の幻にさへ、心で愛撫した人ではなかつたか？
ましてその人は自分を愛してくれてゐる、と思ふと彼女の心は挫けた。彼女はうなだれて元子のあとについて行つた。

「田内さん。」

元子が笑つて言つた。

「薊さんはあなたに逢ひたくないんですつて、なにか、二人で喧嘩でもしたんですの。」

春雄は笑へないで、ひきつるやうに頬がほてつた。彼は黙つて、百合子をみつめて胸をとどろかせた。その年まで、彼が音楽といふ一つの道にいそしんで来ただけに、彼はまだ純なものに生きてゐた。彼は百合子の青さめてゐる様子を見て、自分の軽卒なのを、彼女が嫌つたのではないかと思つて胸をいたくしてゐた。

直彦はそこにゐなかつた。

「先生は。」

百合子は誰にともなく上づつた聲でたづねた。

「昨夕はおそくまで作曲にかゝつたので、まだ起きませんわ。呑氣ですはねえ。」
元子はこたへながら時計を見た。

「もう十一時ですわ。起きて來ませう。」

元子は立つて二階に上つて行つた。女中は子供でもあやしなから外にゐるらしく、そこらに見えなかつた。

しばらく二人は黙つてゐた。百合子は顔をあげてちらりと春雄を見るところなだれてしまつた。
「怒つてるんですか、菊さん。」

「いゝえ。」

春雄のふるえてゐる聲に彼女はさうこたへて、はつとした。魅せられるやうな、やはらかい空気に、ぼつとつゝまれてるやうな氣がした。恐しいけど、それはうれしいやうにも思はれた。

「では、僕が昨日したこと、許してくれるんですね。」

「まあ、勿體ない、そんなこと。」

「それなら、僕の愛してることを、あなたは許して下さいませんか。」

「でも……。」

「でも、どうしたんです。僕は大本先生に言つて、さうだ、さうして二人の間の愛をみとめて、貰ふつもりなんですよ。」

「かにして下さい。」

百合子の聲は泣くやうにきこえた。

「私は、駄目ですの。ですから、先生に言はないで下さい。そして今迄のやうに、私を、妹だと思つて……。」

「妹のやうにですつて。」

「えゝ、さうして下さい。私、田内さま、勿體ないけど、あなたを兄さまのつもりで、そのつもりでゐましたわ。」

「しかし僕はあなたを妹でなく、愛のために、一しよに生きる一生の友達……。」

元子が下りて來たので、春雄は口をつぐんでしまつた。そして二人は手持ぶさたに黙つてゐた。

「もすこしねかしてくれつて、起きないのよ。」

元子は笑ひながら這入つて来た。しかし女性のさとい氣持ですぐに二人の様子を見てとると、しづかに坐つてほゝえんだ。元子はたゞかう言つた。

『田内さん、ゆつくりして薊さんの練習の對手になつてやつて下さい。そのうちに良人も起きますわ。』

二人は追はれるやうに、ピアノの置いてある西洋室の方に行かされた。元子はまたそゝくさと二階に上つて行つた。百合子は譜本をとり上げ、春雄も黙つてピアノに向つた。そして幾らかふるえてゐる百合子の聲がひびくと、つゞいて伴奏がおこつた。二人は愛し合ひながら、互にもうなにも言ふことは出来ないで、うたひとつだけ弾きつゞけた。

十

百合子の練習がすんで、彼女が部屋にこもつてから、直彦と春雄は長いこと話しあつてゐた。直彦は元子から二人の間になに事か起つてゐることきいて春雄に忠告したのであつた。

『君には家門がある。よく考へてしないとまちがふよ。元子はあんな性質なので、君達が愛

しあつてゐるならつて同情してゐるけど、僕は少し考へるよ、君の家ではあの人を許すまい。としたら君のためにあの人は泣かねばならない。そしたらあたら天才を蓄のうちに枯らすことになるからねえ。』

『先生、僕はそのことに就いて考へましたよ。僕は家の者を説きつけて、あの人を幸福にするつもりなんです。』

『それは君と一しよになればたら、あの人でも幸福だが、しかしそれは君の周囲の人達が、どうしたつて承知しまいと思ふ。まあ、君もよく考へてくれたまへ。』

『えゝ、それはよく考へます。』

『さうしてあの人に對しては、もう君もこの話には觸れずにおきたまへ。あの人がしばらくして、ほんとに世の中にもみとめられるやうになつたら、或はいろいろな事が、みんなうまく行くかも知れないからねえ。』

『すみません。』

春雄は頭をさげた。

『でも、僕やつぱり前のやうに来て、薊さんに逢つてゐていゝでせうか。』

直彦は笑つた。

『それはいゝともさ。僕はそれまでは人間を不自由にしたくないよ。いままで通りにして、彼女を育ててゝやつてくれたまへ。たゞ天才といふものはこれやすい卵のやうなものだ。君を信じてゐるから、彼女の一生をこはさないやうに、お互につゝましくしてゐて欲しい。それだけを願つておく。』

やはらかいが、直彦の言葉は石のやうに重かつた。彼はそれにおされて、胸の底になにとも知れない重たい憂鬱を感じた。そしてうなだれて歸つて行つた。

『可哀さうに、田内さんは悲觀して歸つて行きましたよ。』

妻のその言葉を直彦はやはらかにおさへた。

『どちらも惜しい人達だ。どちらのためにどちらが傷ついても、樂界から一人を失はねばならない。兩方を生かすために、いまはおさへておくのだ。時がくれば氷のとけるやうに、いゝ解決がきつと來るのだ。』

それは理性の勝つた、四十近い年輩の彼の考へであつた。しかし青春といふものは、火のやうに燃え上るものだ。うつろひ易い若さの間に、それは焰のやうに心にひろがるもの、それは理解ではなくて、人間の盲目の意志がさせる、青春の呼吸であるのだから、轉落する石のやうに、谷底に到らないで止まることは出來ないのであつた。

春雄はそれから度々やつて來た。時としては直彦からの許しを得て、二人は連れ立つて音樂の集まりに出て行つた。春雄はまた新しいレコードの多くを、乏しい大木の家プログラムに加へて、百合子の鑑賞のために役立てゝくれた。

『すみません。』

彼女は頭をさげて、深い感謝のために涙ぐむのだつた。しかし二人の間には、その時以後もとのまゝの清らかな交はりが復活して、互につゝしみつけてゐるやうに見えてゐた。それは火が焰となる前の、しづかに美しい光であつたのであつた。

ま夏になつてから、春雄はしばらくの間、暑を避けるために鹽原に行くことになつた。彼は直彦に言ひのこした。

「是非、奥さんや薊さんを連れて来て下さい。別荘は廣いから、それに今年は誰もあちらには行かない筈であいてゐますから、充分練習が出来るんです。それに今年はアメリカものですけど、グランドを一つそなへさせました。」

行つてしまつた彼からまた手紙が来た。

それはやはり直彦に、暑さを避けての作曲をすゝめることゝ、百合子を伴つて来て欲しいことであつた。

「あなたがいらつしやらないなら、私は東京に歸らうと思ひます。一人でこもつてゐると、憂鬱で死ぬやうな氣がします。」

そんなことも書いてあつた。

「苦しんでゐるんだなあ。」

直彦はその手紙を見てひとりごとをしてしづんでゐたが、なにやら決心して百合子呼んだ。

「薊さん。」

「え。」

「あなたにたのむけど、一人の男を救つてやつてくれませんか。」

「えつ、どうしてですの。」

「田内がひどく苦しんでゐるらしい。一つ鹽原に行つてやつて欲しいのです。」

「……………」

彼女は黙つてうなだれてしまつた。それは春雄が彼女にも言ひのこしたことだつた。

彼女はやつと言つた。

「先生。」

直彦は黙つて百合子を見つめた。

「私、一人では、恐しいんですの。」

「うむ。」

「私、私だつて、やつぱり女なんですわ。」

こゝに到つて彼女の涙が溢れて来た。直彦はちいつと考へ込みながら呟いた。

「田内がなあ、あんな金持でないとなあ。」

翌日になつてから、百合子は早く起きて元子にうつたへた。

「わたし變に胸さはぎするんですの。」

彼女は顔をあからめてつけ加へた。

「田内さんに變つたことがあるんじゃないでせうか。」

元子はこたへなかつた。さうしていたまじさうに、この哀れな處女をみつめて心に呟いてゐた。「この人も苦しんでゐるんだわ。あゝ、この人達はどうなるのだらう。可哀さうに、愛し合つてゐながら、離れ離れに苦しんでゐるなんて。」

その日の午後、百合子はそれはそはとしてゐたが、机の上につふしてゐるうちに、むらむらと心にわき立つて來る波をおさへ切れないで呟いた。「行かう、やつぱり私もあの人になつては、あの人と一しよでなくては、生きてゆけないんだわ。」

彼女は夢のやうに立ち上つて、ふらりと家を出てしまつた。それからつとりと考へにしづみながら停車場に向つた。どこへ行くのか、彼女に理性はかへつて來ないで、ぼつとした心をたゞ感情の霧がつゝんでゐた。

彼女は誰にもなく呟いた。

「あゝ、あの人に逢へさへすれば、私は、それでいゝんだはねえ。」

「どこまで。」

改札口で彼女はその聲をきいた。

「鹽原よ。」

「鹽原……西那須ですわね。」

「え。」

彼女が鉄を入れて貫つた時、すぐに電車がそこへ來た。彼女はその中に乗り込んで、ぼんやり人々を見廻した。

「私はどこへ行くんだらう。」

彼女は切符をみつめた。

「さうだ、あの人のところへ行くんだつた、あの人のところへ。」

彼女はうなだれてそれを考へた。たゞそれだけより外に彼女の胸の中にあるものはなかつた。

そして自分が霧のやうなものに取り巻かれてどこかへ連れて行かれるやうな気がした。

彼女は夢のやうに、その霧の行くところへしたがって行くのだつた。

新宿でのりかへたのも、上野で汽車に乗り込んだのも、汽車が走つて行くのも、彼女にとつては酔人がふらふら行くのと同じであつた。たゞ酔人はアルコールに、そして彼女は愛に身をまかせてゐただけ違つてゐた。

夜になつてから彼女は西那須驛にとぼとぼと降り立つた。切符をわたしてから彼女はその見知らぬ夜景の中に自分を呼ぶ聲をきいてゐた。

『どちらへ。』

『田内さんの別荘よ。』

『はつ。』

その人は急にねんごろになつて自動車を呼んだ。

『紅葉山の新御殿のお客さまだ。』

『おう。』

車は走つて来て彼女をそれにのせた。彼女はぐつたりと疲れて、よりかゝりに取りすがつて、たゞよゝと泣きくづれた。なんのためかは知らず、彼女はたゞかなしいまゝに、その走るにまかせて、聲をしのばせて涙をながしつゞけた。自動車は風のやうに闇をついて、彼女を愛する者の胸へとはこんで行つた。夢のやうな彼女の心はその人の胸になげ込まれて、魂は火のやうなそのいたみとよろこびに嘆いてゐただつた。

第三部・許されざる者

— 薊の歌姫・續篇 —

秋はまた風のひびきからはじまつた。風のめぐる武蔵野のほとり、代々木の原を近くひかへた小さい丘の上に、林にかくれた小さな家が立つてゐた。田内春雄と泉由里子の愛の殿堂はそこであつた。

眞晝そこからしづかだけれども華かな唄聲が洩れて來た。夜々はよろこびにふるえるやうな唄と、高く鳴るピアノの伴奏が、代々木の原の奥深く流れて行つた。二つの愛の魂はそこにかくれて、さびしいけれど楽しい住家をつくつてゐた。それらの幸福は冬の蟻のやうに、生に許されてゐなかつたが、彼等はそれでも幸福であつた。

春雄は學校を止めてしまつた。

百合子がそれを止めた時、彼はそれをうれしくきいたが、そのためにその考へをすてなかつた。

『いゝんだよ、あなたが大木先生にそむいて出て來たやうに、私も自分で先生といふ厄介な仕

事をすてるのだ。日本がうるさければそのうちにフランスにでも行くことにしよう。私達は自由なのだから。』

百合子が鹽原に出奔した時、大木直彦はすぐに電報を田内春雄によせた。

『アザミキツトユクフミト、マレ。』

しかしその電報が着いた時、二人はその踏み止まらねばならぬ境を越えてしまつてゐた。しづかな山の上の別荘で、彼等は涙の愛を誓つてゐた。

さうして二人の連名で直彦に送られた翌朝の手紙はたゞ許してあつた。『二人の愛を許してくれ、彼女はおのゝいて、恩師にその許しを願ふことの大きな罪を思つたが、それは取り返すことの出来ないことだつた。

直彦のそれに對する返辭は短かゝつた。

『許すも許さぬもない、二人は幸福であつてくれ給へ。そして菊さんはその音樂の努力を無駄にしないやうに。たゞ、いま田内君といふいゝ夫でありバトロンである人を得た人に私はいらなと思ふし、今度の結果は私として世に恥づることであるから、斷然二人に足踏みして貰ひたくな

い。これは自分が藝術に對する純情から言ふのでなく、金のために菊氏を田内君におしつけたと思はれるのがいやだからである。けれど私はひそかに二人の愛のためには乾盃をあげる。いづれそのうちに機會を待つて再び交りを回復したいと思つてゐるが、それは菊氏の名が田内に變つた時でありたい。』といふやうな意味なのであつた。

彼等はその直彦のあたゝかい心に泣かされた。しかも愛に酔つてゐる二人は、その來るべきところへ來た時、その直彦の言葉の裏に含まれてゐるものを考へてゐるだけの餘裕を失つてしまつてゐた。

『二人は結婚するのだ、もし一門の連中が反對したら、僕は家を出てしまふ。』
春雄はそれほど思つてゐた。

『どうなつてもいゝわ、この人とさへ一しよにゐられるなら。』
百合子もそれを心に誓つてゐた。それは愛の情熱の中におぼれこんだ二つの魂の、盲になつたやうな烈しい焰であつた。彼等はその焰の光にうたれて目がくらむやうに、毎日をうれしくしてゐた。

山上は涼しく、水は美しく、家は廣くしづかであつたから、二人のその一日はたのしかつた。さうして彼等は東京に歸るとすぐにその新居を求めてそこに移つた。春雄が秋になつても本宅の方に少しも歸らないので、一門の人々の中には彼の一身上になにか起つたことを氣づいた者があつた。學校の方を止めてしまつたことが、そのうたがひの根をつきとめることを急がせた。

彼等が幸福に酔つて、結婚！ といふ最も急なことを忘れてゐる間に、一門の人達やその合名の事にあづかつてゐる人々が、よりより相談をつゞけて、その手は魔のやうに二つの影のうしろにのびよつてゐた。

ある日外出した春雄がうれしそうに歸つて來た。

『おかへんなさい。』

あはて、迎へ出た彼女の手をにぎりしめて彼はさゝやいた。

『いゝことがあるんだよ。』

『なんですの、それ。』

『あてゝごらんよ。思ひもかけないやうないゝことなんだ。』

二人は控室に這入った。彼はレイン・コートをぬぎながらまたいつた。

「あてゝ見るといゝよ。」

彼女は心で考へながら微笑した。さうだ、あれに違ひない、と思つた。

「結婚のことでしよ、きまつたの。」

「違ふよ。」

彼はそれにこたへながら不安な顔をしたけどすぐうれしそうに叫んだ。

「そんなうちのことではないのだ。外のことだ。ほら、外のことだよ。」

「わからないわ。」

「あゝ、さうさ、かんがへたつてわかりつこないさ。例の會館の音樂會ね。僕にベロトーヘンをたのんでよこした。そこへあんたが出るやうに話をきめて來たのさ。」

「まあ。」

彼女は眼を輝かした。

その音樂會は毎年秋にひらかれる催しの中で、その道の人達の一番重く考へてゐる集りなので

あつた。それはそこに新しく推選された音樂家は必ず一流として目される人ではならなかつたからであつた。きゝに集るのも、會員にのみ限られて、その道の人達や上流の人達ばかりなのであつた。さうでなくてもその人々は、音樂の愛好者としてそこに這入られる鑑賞の資格を持つてゐる、學者や文人に限られてゐた。

「もうあなたは樂界に出たも同じだよ。」

春雄はさう言つてそれから濡れたやうな彼女の瞳をみつめた。

「實はね、その推選をしてくれたのは大木先生だよ。だから向ふから話が出て、僕があなたへの交渉を引受けて來たのだよ。大木先生が一つ伴奏をしてくれるさうだ。僕も一つ弾くよ。とにかくはじめての出席に二つうたはせるだけでも破格だ。すぐに唄をきめて通知しておくといふ。大木先生もそのうちに、用もあるし一度伺ふつて言つてたさうだから。」

「まあ、大木先生が。」

彼女はなにも言へなくてうなだれた。

その人がフランスから歸つて來て、演奏をしたのはたつた二度つきり、それ以後とちこもつて、

作曲と思索をつづけてゐた。それが彼女のために伴奏してくれる、それだけで、彼女が世に出るのに充分であつた。

『先生、すみません、あゝ。』

彼女は心におだやかなその人の面影を思ひうかべて祈るやうに呟いた。涙がとめどなくうれしく流れてゐた。

一一

その音楽会でうたふために、彼女は自分で四つほどえらんでみた。その中に一つ、ある詩人の作品で大木直彦が作曲したものがあつた。

春雄はそれを見て眉をひそめた。

『この唄はいやだね。苦しみこそ人の生の、なんていやに暗い唄ぢやないか。』
彼女はつゝましくこたへた。

『ではよしますわ。でもそれは先生が御自分で、その作曲が氣に入つてゐられたのですのよ。』

そしてよくおつしやつてでした。もしあなたが會にはじめて出るやうだつたら、これをやつて貰はうかつて。』

『それでもそんなのよりか、もつと大きなのがいゝと思ふね。その方があなたの實力を示せるよ。』

『えゝ、さうしますわ。』

けれど彼女はさう言ひながら、やはり暗い作品をえらぶ興味を感じた。そしてあれこれと迷つてゐるうちにやつぱり元にかへつて來た。彼女はそれをうつたへた。

『どうしてでしょ、「この暗き墓に」とか先生のあの曲とか、どうしても變なものばかりやりたゝ氣がするのよ。』

『なんでもないさ。カルパニは例の僕等のはじめて逢つた時のだし、一つは先生の曲だからだよ。いゝさ、それにきめとくさ。』

『でも私、おそろしくて。』

彼女はさつと青ざめた。

『もし、そんな苦しい、悲しいことが出来て来たら、私、ほんとに生きてられないやうな気がするの。』

『そんなセンチメンタルになりつこなしにするさ。僕等は幸福だよ。これ以上の幸福があるものかね。』

『でも。』

正式に結婚を許されなければ……と言ひかけて彼女は黙つてしまつた。そして暗く思ひ沈んだ。春雄にそれをいふことは、あまりに彼を責めることになる氣がした。

『これでいゝんだわ、これで。』

彼女は自分に言ひきかせて、それから華かな曲を一つと、大木の作曲のそれとをえらんだ。

『これに決めますわ。』

『やつぱり大木先生のは思ひ切れないんだね。』

春雄は美しく笑つた。彼はその曲から暗い豫想などをおこさないで、それをうたつた。あの彼女の名聲を心に畫いてゐた。

天才といふことがわかれば、家の連中だつておどろいてなんでも許してくれるさ、と彼は思つてゐた。

その日が近づいて、彼女は毎日練習をつとけた。春雄もあまり外に出ないで、彼女の練習を手つたてくれた。幸福の鳥が翼をひろげて二人の前に舞ひ狂つてるやうに、彼等には思はれたのだつた。時として彼女は結婚のことを考へて寂しくなることがあつたが、自分で氣をまぎらせてそれを考へないやうにつとめてゐた。

『どうしたつて、あの人は私のものだわ、いゝわ。』

彼女はさう思つてあきらめた。

十月の中旬すぎの一日であつた。春雄は一門の相談會があるので、どうしても出なければならなくて出て行つた。

『今夜はおそくなるか知れないよ。大低歸つてくるつもりだが、あまりおそくなつたらあちらへ泊まるから。』

『えゝ、でも、歸つて頂戴！ 會はあしたなんですもの。忘れちやいや。』

「うむ、知つてるよ。けれどまさかぬけてくることは出来ないし、わがまゝ言つちや困るね。」
「ぢや、いゝわ。あしたの朝早くね。」

「そりやあ、早くなら歸るとも。」

彼等は熱い接吻を交はした。

午後になつて彼女が練習をつゞけてゐると、女中が來客を知らせた。彼女はその名刺を見ておどろくと聲をあげてかけ出した。

「先生がまあよく。」

彼女は直彦のそばに品のいゝ老人がひかへてゐるのを見て、はつとして立ち止まつてしまつた。直彦は彼女を見ると重々しく言つた。

「菊さん、到頭たづねてくることになりました。會はあしたですね。」

「どうぞ。」

百合子は二人を應接室にみちびいた。來る客とてもなかつたが、そこはきちんとかたづけられてゐた。そして恐らくその客は、はじめてで、また最後の客であつた。

二人は席に就いたが、直彦はその老人を紹介しなかつた。さうして老人はたゞほゝえんで彼女をみつめてゐた。

直彦が言つた。

「あしたの會のを合はせませうか。」

「どうぞ、ほんとにすみません。」

直彦は老人をかへりみた

「あなたもきゝにいらつしやつて下さい。」

「はう。」

老人もつゝましく立ち上つてあとにつゞいた。彼女はすがりついて泣きたいやうな直彦が、その誰ともわからない老人を丁寧にするのがふしぎな氣がした。その人を紹介してくれないのももどかしかつた。

廊下を一めぐりして彼等は洋室風になつてゐる廣い離れにとほつた。

百合子と直彦が練習してゐる間を、老人は腰かけもせず立つてきいてゐた。直彦は二三度唄

をくり返へさして注意して立ち上つた。

『あなたのうたひ方は伸びて来ました。元から見るとうるほひが出て来た。非常にいゝことです。』

彼はすぐに気が付いて坐つた。

『それから一つの唄は。』

彼女は顔をあからめた。

『あの、それはあの人が弾いてくれる筈ですの。』

直彦はちらつと笑ひかけてそれから重々しく言つた。

『いや、會の方で私にと言つてゐましたから、その時の都合で田内君にやつて頂くとして、一度合はして置きましょう。』

『どうぞ』

彼女はなにか胸さはぎをおぼえたが、譜本をくつてうたつた。それは華かな『戀のファンタジオ』であつたが、彼女は自分で聲のふるえるのをおさへることが出来なかつた。

『いゝでせう。』

直彦はすぐ止めてしまった。

『あちらに行きませうか、菊さん。實は少し話があるのですが。』

『こゝで結構ですの。かへつて誰も来ませんから。』

彼等はそこで小さな卓を中にして坐つた。そこは佐々木の原を見わたした座敷で、秋の空がその上に美しく輝いてゐた。

『いゝところですね。』

直彦はその景色を見わたした。老人もうなづいて黙つてゐたが、その指先がふるえてゐるやうに見えた。彼女はなにもこたへられないほど、胸の鼓動が高まつてゐた。不安な嵐の前のやうに、彼女は直彦が言ひ出さうとして躊躇してゐる様子を見た。

三

『菊さん。』

『はろ。』

直彦はちつと彼女を見つめた。

『實は僕、大變言ひ憎い用をたのまれて來たんですがね。その前に紹介する人があるのです。それはこゝにゐられるこの方ですが、藤本さんとおつしやる、なにかあなたその名に心あたりありませんか。』

彼女は老人をちらつと見てうなだれた。

『藤本、藤本。』

彼女はさう呟いたが、なにも思ひ出すことはなかつた。直彦がつゞけて言った。

『藤本太刀造さん、おぼえてゐませんか、薊さん。』

『あ。』

彼女はのけぞらうとするやうに身をゆるがせた。祖父の良三が口にしたその名、弟の太刀雄につけられたその父の名、父、父であつた。彼女はまぶしいものでも見るやうに、まばたいてその父を見つめた。すぐに涙がその瞳をくもらせてしまつた。

老人が叫んだ。

『由里子、お前の父だ、お前が四つになるかならない時分にわかれた父だ。』

『はろ。』

彼女は取りすがりたかつた。しかしその瞬間に彼女は死んだ母の聲をきいた。

『父さんに逢つたら、私が憎んで死んだと言つておくれ。』

彼女は唇をかみしめて、祖父の良三や、弟の太刀雄のことを思ひうかべた。零落して行く家のために、自分が借金の抵當にならうとしたことも思ひ出された。

彼女は黙つて老人をみつめた。

手をひろげて、彼女を待つやうに、やさしく涙をためてゐる老人、けれど彼女は固く身をちよめて身をすさらせてしまつた。それから彼女は唇をふるはせた。

『父さん、でも私、どうしたらいいのか、か、母さんは、一生、父さんをうらんで死にましたよ。』

老人は絶望したやうに青ざめて、額に冷たい汗をうかせた。

「許しておくれ、私がわるかつたのだ。」

「あゝ、それが早く、早く、わかれば。」

彼女は泣きふしてしまった。はじめて逢つた父、その父にも取りすがることの出来ない身であつた。

「いゝえ、いゝえ。」

彼女は身をもだえた。

「私には父さんがないのです。父さん、私を忘れて下さい、私を。」

直彦が彼女をなだめた。

「菊さん、さう興奮しないで下さい。實は藤本さんはいま田内家の家扶のやうな役をしてゐられる。そして今日は父としてあなたに逢ふことよりか、もつと重大なことで来てゐられるのです。」

「はゝ。」

彼女は胸をとどろかして身を起した。涙はつゞいて流れてゐたが、青ざめた心の底は冷たく、直彦の言葉を待つてゐた。

「藤本さんはその用で私のところに來られた。そしてあなたの生立ちをきいたのです。ふしぎにも、それが御自分の娘であつた。藤本さんはどんなに辛いか知れない。しかし私情に曳かれて田内君をほろぼす、いや田内一門の中でも一番由緒の深い田内家をほろぼす譯に行かないのです。私のやうな自由主義者でも、やはりそれを認めない譯に行かない。ねえ、藤本さん、これからあなたが話してやつて下さい。」

老人は涙をしばたいた。

「はい。由里子きいておくれ。私はお前といふことは知らなかつたが、若様のことが御一門のお耳に這入つて、今日その御相談の集りがあるのだ。實は若様には、この春から御縁談がはじまつてゐて、それはある華族様の御姫さまなのだが、どうしてもその御方を貰はない譯には行かないのだよ。そして若様のお耳には入れなかつたが、内々きまつてゐて、もう表向きにするばかりになつてゐた。」

老人は黙つて彼女をみつめて、それからしづかに身をすゝめた。

「そこへ急に、若様がこんなことになつてしまった。それでこの事がもし先方の耳に這入ると、

いろいろとむづかしいことが起る。少なくとも若様だけは、一生すたれものにされて、田内の一門から追はれておしまひなさるか知れない。そればかりか、今日若様が相談會においでになれば、そのまゝ明日の汽車で二月ほど南支那の方に行かせることになつてゐる。さうして歸つておいでになれば、すぐ御結婚をなさる。ねえ、もう若様は、決してこゝへ歸つて來ないのだよ。』

『あゝ。』

百合子は自分が奈落の底へ、ずんずんと落ちて行くやうな氣がした。そして老人のその聲はとほくの方にひゞいてゐるやうに思はれた。

『ねえ、あきらめておくれ。私は、その娘がお前だとわかつた時、どんなに苦しかつたか知れない。しかし大木さまとも相談した。やつぱりお前があきらめて、自分だけの道で立派になるより仕方ないのだよ。お前があの方をあきらめて、もしあの方の方でもあきらめられるやうにしてくれるなら、どんなにいゝだらう。さうすれば御一門の方もさうおつしやつてる、このお邸をそのまゝお前のものにして下さつて、その外に二萬圓ほど、お前に下さる……。』

『止めて下さら、父さま。』

百合子は絹を裂くやうに叫んだ。

『わかりましたわ。みんなわかりましたわよ。私にとつて、あの方は勿體ないほど、いゝ方でした。そしてあの方が私を愛して下さるなんて、私は夢にも思ひませんでした。ねえ、私はあの方をあきらめますわ。けれど、お邸、お金、あゝ、あの方はそんなものに代へられる、卑しい方ぢやありません。私はあの方をあきらめますけど、そんなものはなんにも頂きませんわ。』

『どうしたといふのだ。』

老人はうろたへて叫んだ。

『金がいらないうちで、金がありさへすれば、世の中はお前の、思ふようになるぢやあないか。』

『いゝえ、いゝえ。』

彼女はその父をおしやるやうに手をふつた。そして涙に浸たつて叫んだ。

『父さま、あなたはお金に代へられないものが、この世にあることを知らないのです。行つて下さい。そしてみんな承知した、しかしお金は一文も頂かないと言つて下さい。あの方には手紙を書きます。そしてあの方が私を見ずてるやうにしますわ。私は、私は、やつぱり薊の花！ ああ』

方についてゐて、あの方を不幸にしたくないばかりよ。』

『運命だ、これが、あなたの。』

直彦はさう叫んでうなだれると、彼女のために涙をこぼしてゐた。彼女はそこに、すがるものない青空を、とほく涙の瞳にみつめた。『みんな、かうして駄目になつてしまふ。』彼女の青ざめた心の咬いたのは、おそらくそれに似た空虚なあきらめであつた。

四

藤本老人はちつと彼女を眺めてゐたが、哀れむやうにその手をふつて直彦をみかへつて言つた。『金の大切なことを知らないには困りますな、大木さん。』

直彦は黙つて百合子をみつめた。

老人はまた彼女に言つた。

『ねえ、そんな強情をはらないで、貰ふことにおし。それでなくてもいゝ、とにかく一度こゝをたゝんで、わしの方に来ることにしたら。なあに、世の中なんて広いから、いつかお前だつて

悲しいことは忘れてしまふにきまつてゐる。それにお前は音楽の方とかど大變いゝといふから、それで世の中に出られるといふものだよ。』

『歸つて下さい。』

突然百合子が顔を上げて叫んだ。

『私は乞食をしたつて、父さまなどの世話にはなりません。いゝえ、私はお母さまと一しよに、父さまを憎みます。あなたのお蔭で家はつぶれてしまひ、私達もこんなに苦しんでゐるのです。』

『な、なにを言ふのだ。』

老人はあはてゝ立ち上つた。

『わしはわるいことを言ひはしないんだ。お前のためによかれと思ふから言ふのだ。』

『いゝえ、いゝえ。』

百合子は頭をふつた。

『父さま、私は父さまのいふことにも、たしかにほんとのことがあると思ひますの。しかし私はそんな氣持になりたくないのです。そしてあなたの厄介になる。私に、私にそんなことが、ど

うして出来ませう。私は一人です、一人でやつぱり生きて行きますせう。』
『そんな強情な……。』

老人はなにかを言はうとしたが、すぐ唇をふるえさせて黙つてしまつた。そしてうろたへたやうに腰を下してうなだれた。

彼女は喘ぐやうに息を切つた。

『父さま、許して下さい。私は不幸な子ですわ。けれど、けれど、これが私の行く道なのです。あの人には、いゝえ、若様にはあしたの朝、きつとお手紙を持たして上げますわ。ねえ、父さまのために、生涯にたつた一つだけ孝行をするのです。そのお手紙を見られたら、若様はよるこんでとほくへいらつしやる……。そしてあしたの朝早く、私はこゝにゐないでせう。』
『さうしておくれ、それがお前のしななければならないことなのだ。』

夕に近く秋風が吹き出した。彼等は沈黙に落ちたまゝ、その風の音をきいた。彼女に涙はなかつた。あるのはその風よりもはかない、青さむしい心ばかりであつた。

やがて歸つて行く藤本老人のためにも、彼女はそこを立たうとしなかつた。直彦がそれを見送

つて歸つて来た。

『菊さん。』

『は。』

『あなたは悲しからう。しかし私としてもこれをどうすることも出来ないのだ。たゞ音楽をすてないやうにだけ願ひする。そしてそのためにあなたの道は、もう明るく開けてゐる。あしたの獨唱に出て下さい。あなたはそこにだけは失望しないで行けるのだ。』

『はい、出させて頂きますわ。』

彼女ははつきりと言つた。

『あしたの後、あさつてになつてどうならうと。それまでは私、やつぱり先生のお弟子ですわ。あゝ、うたはせて下さい。私の一生の思出のためにも。』

『それがいゝんです。』

直彦はしづかにさびしくほゝえんだ。

『路はひらけて来る。私も久しぶり、あなたのために弾きたい。どうぞ願ひしますよ。』

彼が歸るのを見送つてから、彼女は自分の部屋、今朝まで二人のために愛のたのしいところであつたその部屋に歸つた。ぐつたりと疲れたやうな味氣ない氣持、

『あゝ。』

凡てを破りすてたいやうなもたえ！ 彼女はたゞ自分がそこに坐つて、暮れて行く秋を物思ひに沈んでゐることを知つてゐるばかりであつた。

狂ほしく、泣かうにも涙の出ない苦しみに胸をしめつけられて、彼女はそこに、うらめしい自分を見た。

薊！

『私はやつぱり野に咲く薊だ、一生を人に嫌はれてすこして行くのだ。咲いても散つても、それに誰がかゝはらう。』

彼女はそれからやるせなく泣き出した。涙さへ、彼女を冷たくさむしくさせ、凍るやうな惡寒が彼女をおそつて來た。

長く泣きつゞけた後、彼女にかへつて來たのは、たゞ一つ、その人のために手紙をかくことだ

つた。彼女は、ペンを取り上げて、悲しくうちふるえる手にしたゝめた。

はく情ものゝ私は、あなたをすてました。私はもうあなたに逢ひませぬ。わたしは、今まであなたをだましてゐたのです。だましてお金のために、いゝえ、わたしは、あなたをお金のために愛してゐたのです。

さよなら、もう逢はれませぬ。私は外の人のところに行くのです。

春雄 さま

薊の花より

涙ながらに書きつゞつて筆をすてると、彼女は唇をかみしめて、それから長い間石のやうに動かなかつた。狂ふやうな嵐がとほりすぎると、彼女の心は冷たい雪の中に凍えて、血さへも胸の底にひえてゐた。たゞ涙だけが熱い血のやうに、頬を一筋ながれて、青白い石像のやうに沈黙した彼女の悲しさを語つた。

夜になつてから彼女は、その手紙を自ら郵便局に托しに行つた。その速達をうつてしまふと、彼

女は小暗い道をえらんで、闇の代々木の原にさまよつて行つた。秋風に吹かれて、野をあてどなくうなだれて行く彼女を、空の星々が高く見下した。そして天の川は長く尾を引いて、とほく北の空に向つてながれてゐた。彼女はその星々の、小さい光すら決して見なかつた。

五

百合子は家に歸ると、まだ眠らずに彼女の歸りを待つてゐた女中達をすぐ部屋に引き取らせ、自分一人ぢつと思ひ沈んでゐた。しばらくして彼女は凡てが過ぎ去つてしまつて歸つて來ないことに気が付いた。「なにを私はほんやりしてゐたのだらう。」

彼女は小さいトランクに、自分の身のまはりのものをほんの少し入れた。その中には春雄の寫眞の這入つてゐる机立の小さい額も這入つた。

彼女はそれから春雄のものを始末しはじめた。愛人の匂ひの移つてゐるハンカチ一つでさへ、彼女はそれを愛着を持つてうちまもりながらかたづけしてゐた。夜はいつか更けて行つた。しかし彼女は泣きすゝりながら、胸をふさがれるやうな苦しみに喘ぎながら整理をつづけた。

「あの人が着てゐたのだ。」

彼女は肌着の匂ひに移つてゐるその人のやはらかい胸を思つた。「あゝ、私はこゝで死んでしまつた方がいゝのではなからうか、このまゝ眠るやうに。」

「うゝえ、うゝえ。」

彼女は物狂はしく肌着を抱きしめた。「私は生きてゐよう。せめてあの人の面影をこの胸に抱きしめて生きてゐよう。さうしてあの人のために、陰ながら幸福を祈るのだ。」彼女の手ははかどらなかつたが、夜は風の音と共に更けて行つた。どこかとほく、都會の夜を起きてゐる工場の笛の音が鳴りひびいて、露は地上に空から降り下つた。こゝに泣くものも、かしこに働くものも、同じく人生の姿でありながら、一つは身をほろぼすための時々を、一つは營々として生くるための時々を持つことが違つてゐた。

「私があの人から補助して貰つたことが、はじめから間違つてゐたのではあるまいか。」
彼女はその夜を働きつづけてゐる人達のことを思つた。

「私の天才！そして私の愛……それがどうなのだらう。あゝ、私はやつぱり、いくらあの人

が愛してくれただとしても、金持のおもちゃになつてゐたのではなからうか。あの人にしても、氣が付かないで、私をたゞ自分の愛の遊戯の中に受け入れたのではなからうか。そして私はそれに氣づかない、愚かな女であつたのかも知れないわ。』

「曉が近づく頃、彼女のその考へは少しづつはつきりして來た。」

「社會のどん底に泣いてる人、虐げられてる人達、その人達の膏と血が、私達の愛の遊戯の糧になつてゐた。わるいことだわ。そして私があの人をえらんだのにも、やはりあの人社會的な位置が私の胸に巢を喰つてゐたのだわ。」

彼女は呟いた。

「人生なんてなんだろう。金なんて、いつたいなんだろう。貧乏がいゝ、天才もすてた方がいゝ。私は私に生きた方がいゝ。」

それはめざめといふにはあまりにさびしいめざめであるが、やはりそれであつた。愛の陶醉からさめて彼女は人生の中に、孤獨に生きてゐる自分の姿を見出した。

しかしそれはなんといふ、うらぶれた心の姿であつたらう。よるところを失つた、一つの小さ

い魂の、蹠躑とした歩み、廣い人生の海原に漂つてゐる粟の一粒、それがその時の彼女の心であつた。しかもその姿は、この人生に沈んで行く幾多の人々の、消えて行く姿でもあつたのだ。神にすがり、佛にたのんでも、人は生きて行く苦しみに嘔ぐより外にない。彼女の面したものは、そのどん底にも似た、放浪者の持つニヒリズムのうなづきであつたのだ。

死なば死のうと、身はまゝよ、

咲いて散るのも身の定め。

曉になつて風がしづまつた。彼女は立ち上るとすぐ机によつて一つの言葉をしたゝめた。それはたゞ一句、「去るものよ、幸福であれ。」彼女はそれを封じるとき、自分の指からリングをぬいた。うちかへせばそれには約婚のしるしとして彫られたH・Yの文字があつた。彼女はそれを封筒におさめて呟いた。

「これでみんな終つてしまつた。」

彼女の心は錆びて、青い苔が胸の底をぬめぬめと這つてゐた。古くさつた沼におぼれこんだやうに、彼女はそこから浮び上れなかつた。泣きしぼつた涙も涸れ、青ざめた顔も一夜のうちに瘦

せて、燃えてゐる瞳だけが美しく輝いた。

彼女は愛人の手箱の中にそのリングの封筒を秘めると、しづかに立ち上つて廊下をわたつて行つた。

それからしばらく、代々木の原を吹きすぎる曉の風がピアノのひびきをきいた。そしてそれにもなつてくる唄聲の、美しくさびしさは、嵐のあとで難破船を洗ふ波のやうにやさしくしかもなげいてゐた。華かではあるが、それを愛の挽歌の、彼女の胸を凍らせる秋の唄であつた。

秋の日のヴィオロンの、

ながきながきすゝりなき……

ヴェルレエヌはそこにうたつてゐた。その唄と共に東の空は白んで、いつか夜は明けはなれ、やがて血のやうな太陽がのぼつた。

はたと唄の聲が止んだ。

やがて朝早い代々木の原の露を踏みしめて俤が走つて行つた。それは永遠にそこを別れて行く彼女をのせてどこかへ消えて行つた。彼女がどこを志してゐたか、それは空をあまねく照らし

てゐる太陽より外には知らなかつた。

六

それから一時間ばかりの後であつた。狂氣したやうな自動車が一臺、代々木の原の草をふみしだいて、その家へ乗りつけられた。

とび降りたのは田内春雄であつた。

彼はつかつかと行かうとして、運轉手に呼び止められた。

「旦那、自動車賃を。」

「あゝ。」

彼はうめくやうに呟くと、財布をかきさぐつて五圓札を運轉手の手に投げ出した。

「御苦勞歸つて。」

「お釣を。」

「要らな。」

彼は家の中にとび込んだ 物音に女中がかけつけて来て彼を見た。

「奥さんは。」

「もすこし前にお出ましになりました。」

「あゝ。」

彼はよろめくやうに壁によつたが、なほたづねてゐた。

「どこへ行つたのだ、どこへ。」

「なんともおつしやいませんで。」

「むう。」

彼は血走つた眼を上げた。それから狂氣したやうに二階にかけ上つた。「やつぱり逃げて行つたのだな、俺を出しぬいて。それも急に俺が旅行に出ようとする前に。」

「あざむかれたのだ。」

彼は狂亂に似た心をおさへて、うたれたやうにそこに立ちすくんで吠いた。その部屋はきちんと片づけられて、誰もゐなかつたかのやうにがらんとしてゐた。

彼はポケットから手紙を取り出すと、それをひらいて見つめたが、すぐに唇をふるはせると、力をこめてそれを引き裂いて投げ出した。それから彼は子供のやうに地團太をふむと、なにかを蹴り出すやうにそこを駆け出した。

彼は自働車が待つてゐるやうな氣がして表にとび出た。

「さうだ、返したのだつた。」

彼は狂ふがやうに朝の陽にうたれたまゝそこに立ち盡くした。凡てのものを失つてまで愛しつづけようとした彼女が、自分をすてゝ行つたことに、彼は泣くよりか苦しい痛みを感じた。

「僕は、僕はこれからどうするのだ。」

彼は一家の者に代つて、南支那の視察に行くことを命ぜられた。彼は快諾した。どんなにとほくであらうと彼女と二人なら、さうして彼は彼女が一しよによるこんでくれるであらうと思つた。だのにその夜、どうしても本邸であとの事務を處理しなくてはならなくて、顧問の辯護士などゝ共におそくまで机に向はされてしまつた。そして彼はなに事も知らないで、曉に近くなつて眠つた。

彼は彼女のところに歸るために、早く起き出でた。そして枕許の卓に手紙を見た。

『どうしたのだ。』

彼はたかぶる動悸をおさへることが出来なかつた。そしてはね起きると、邸の運轉手を待つことが出来ないで、タクシーを呼ばせた。さうして支度もそこそこにかけてつけたのだつた。

『なにかのまぢがひだ。逢へばきつとわかることなのだ。』

彼はさう信じた。またさう信するより外に自分の心を静める方法はなかつた。しかも事實は、彼の心を裏切つて、彼女が家をすてゝ行つたことを示すばかりであつた。

『どうして?』

うたがつて見ても、そこに彼女のゐないことだけで、彼女の面影も消息も糸の切れたやうに彼からはなれてしまつた。

『彼女は僕をあざむいた。』

彼の心は怒りに青ざめて、もし彼女がそこにゐたら、うち倒してふみにぢつてやりたい程だつた。

しばらくして我に返つた彼は、そこに今度の旅行に彼の伴をして行く筈の、一門の合名社の社員が近づいて來たのに氣づいた。それはとほくから帽子を取つて挨拶した。

それは人形のやうに傍に來てまた頭を下げた。

『え、お邸の方に伺いましたら、こちらの御別荘にこられたとき、ましたので。この度は御視察にお供を仰せつけられました、え、何分不束者でございますので。』

『よしたまへ。』

春雄はぢりぢりして怒鳴つた。

『もつと人間的にしたまへ。僕は、僕は、人間なんだ。それから僕は晩まで家に歸らないんだ。』

君のいゝやうに支度をして……。

彼は自分の言葉がまるで奴隸のやうにその社員を無視してゐたのを考へた。そしてやはらかにうるんだ聲で友達にでも對するやうに言つた。

『たのむよ、君、みいんなね。僕は、だめなのだ。僕はもう疲れ切つて、あゝ、どうしていゝかわからない。彼女は出て行つてしまつたのだ。』

社員はおどろいてたづねた。

『どうかなさいましたか、お顔色もおわるいやうですが。』

『心臓が破けさうなんだよ。』

彼は悲しくさう言つて歩き出した。社員は二足三足見送つて、あきれたやうにぼんやりと立ち止まつてしまつた。彼はそれに気が付かないやうに、あてどなく歩き出した。涙が溢れさうになつたのを彼はちつとこらえてゐた。『彼女はどこへ行つたらう。さうだ、大木先生のところより外に、彼女の行くところはない筈だ。』

彼は露の消えない原を横切つて、代々木の驛の方へ出て行つた。小さな子供が二三人、原のはづれで遊んでゐるのを、ちらつと彼は見たばかりだつた。

『子供はいゝ、なんにも知らないのだ。』

彼は秋空にひびくこれらの爽かな聲を、神のさゝやきのやうにさびしくきいた。『神にも人にも見はなされてしまつた。』人のやうにうなだれて、血の氣を失つたまゝ彼は歩きつゞけた。

七

その夜、貴族會院の裏口のあたりを、うろろと獸のやうにさまよつてゐる影が一つあつた。誰かどそこに来ると、影は惡魔のやうに這つて行つてそつとのぞき込んだ。それから失望したやうにその人から逃げると、またくらやみにたゝすんで忍びやかに人を待つのであつた。それは病みほふけたものゝやうに、のろのろとそのうすぐらい光の下に、物の怪の氣配をたゞよはせて震えてゐた。

少しおそくなつて、そこに來かゝつた紳士がそれを認めた。彼は影のうごくのを捉へるやうにその方につき進んだ。

彼はしづかに影と向き合つた。

『田内君ぢやないかね。』

『そ、さうです。』

影は光に顔をそむけたが、それは春雄であつた。一日を狼のやうに、百合子のあとを追つて、

瘦せるほどの苦しみに喘ぎながら、なほ彼女を求めてゐる彼であつた。

「なにをしてゐるのだ、中に這入つたらいゝぢやないか。」

「先生。」

彼はその人にすがるやうにつき進んだ。その人は大木直彦で、彼もなにかあはてたやうに蒼ざめながらおびえて身をすささせた。

「先生、僕は誰にも逢ふのがいやなのです。僕は百合子に逢ひたい、彼女、彼女はまだ来てゐませんか。」

「さあ、僕はいま来たばかりで知らなう。」

「僕は今朝、先生のところに行きました。彼女は家出をした。私は、今夜急行で、支那に立たねばならない。演奏も、私は、しない、しないつもりです。ねえ、先生、逢はして下さい。彼女に逢はして下さい。」

直彦はやらかに彼の肩を抱いた。

「君は興奮してゐる。来たまへ、控室に行かう。薊さんも来てゐるか知れない。」

「え、だが僕は行つてどうするのでせう、先生。彼女は私をだました、彼女は外に男を持つてゐる。彼女はその人のところに行つてしまつた、外の人のところへ。彼女はそれを私に知らせて行つた。」

春雄はくづおれるやうに直彦にすがつてすゝり泣いた。

「無駄だ。みんな無駄だ。」

彼の聲は涙にとぎれた。それから狂したやうにからからと笑つた。

「僕は馬鹿だ、馬鹿だ。恥づかしい、僕は恥づかしい。いゝんです、はなして下さい、僕は恥づかしくて、誰にも逢へない。歸りませう。私は歸りませう。私はこれから支那へ行くのだ。私が行くところは支那だ。そして彼女は行つてしまつた。」

「待ちたまへ。」

直彦がとめたのを彼はふりもぎつた。それから踰越としてうなだれながら、彼はそこから離れて行つた。彼は火のやうに燃える苦しさから、心が氷のやうに冷えて行くのを感じた。影のやうに暗いところをぬつて、それは夢のやうな悲しさにうなだれて、たゞ自分がどこかへ向つてゐる

のきり知らなかつた。

また影が一つ、向ふから来てすれ違つた。それもうなだれて悲しく、夢心地に歩いてゐるやうに見えた。二つの影はすれ違つて、それつきり逢へないものだつた。行くものと歸るものとは、永遠に道が違つてゐた。

影を見送つてゐた直彦はまた影を迎へてぎよつとした。その影はうなだれた顔をあげて彼を見た。

「あ、先生。」

「菊さん、いまあなたは？」

「え？」

直彦はためらつた。「どこで行き違つたのだらう、二人は？」彼はその心に思つてゐることを言はなかつた。

「いや、よく、よく來ましたね、よく。」

「え。」

光の下に浮び出た彼女の顔は、蠟のやうに白かつた。そしてそのあざさへも花のやうにそこに燃えてゐるやうに見えてゐた。

「這入りませう。」

「え。」

さはらば倒れたであらうやうに、彼女は直彦のあとにつどいた。

番組はもう彼女の出るばかりになつてゐた。直彦を待つてそのおそいのを氣づかつてゐた幹事の一人が、彼等を見るとかけつけて來た。

「おそかつたですね。心配しましたよ。すぐこの次ですから。」

「あゝ、それはすみません。」

直彦はその人を百合子に紹介した。

「はじめで。」

その人の挨拶に、百合子はうなだれて黙禮しただけだつた。彼女は控室の誰も見なかつた。それからすぐみちびかれて階段をのぼつて行つた。

立ち止まつた時、直彦がふり返へつた。

『菊さん、気分がわるくはありませんか。』

『いゝえ。』

彼女は悲しく答へた。

すぐあるトリオ團の合奏がすんで、彼女は扉の中へ、直彦のあとにつどいた。演壇の中央に彼女はうなだれてすゝんだ。明るい電燈の下に黒い喪服、彼女は黒い蝶のやうにその青ざむしい顔をあげた。

『新しい人だ。』

『菊！』

その聲がどこからかさゝやかれた。

彼女の仄かに白い顔は、神のやうにあでやかに輝いて、清らかな悲しさがその姿から匂つてゐた。そしてその右頬のあざさへ、その夜は花のやうにうつとりと赤かつた。小さくふるえながら、彫像のやうに彼女はやさしく見えた。

ピアノがひゞきはじめた。

『大木さんだ。』

聴衆は水のやうにしばまつてしまった。彼女のふるえる唇からやがて唄が洩れて來た。それは『うたがひの歌』であつた。

げに寂しきは、

人の生なりき、

そのうたひはじめから、ほつと聴衆の心に吐息がうつた。魅するやうな聲は、美しく人々の心にひゞいて、さみしくその胸を涙ぐませた。すゝり泣くやうに、彼女は長く美しいリズムを、流れの水音のやうに、やはらかく暗くうたつて行つた。

『あゝ。』

誰かゝ涙にうたれてすゝり泣いた。

『あゝ、あゝ。』

誰かゝその聲に魅されて火のやうに燃え上つた。誰かゝうち沈んで、胸の嘆きに肩をふるはせ

た。それはうたでもなく、聲でもなく、また涙でもなく、多くのさみしさに生きる魂がうつたへる呻きのやうに、人々を地上の夢の底に魅して行つた。

聲はまた高く秋風のさみしさにふるえた。

それから生ける身の嘆きに落ちて行つた。銀鈴のやうに、黄金の幻が湧き出でるやうに、人々は美しい涙に酔ひ痴れてしまつた。

唄は終りに近く、暗愁をたゞよはせた。

聲長くすゝり泣くのは、唄か、さうではない、彼女の魂が、憧憬の消えゆく恨みに、身を以てうつたへるそのさみしさではなかつたか。金のひよき、あゝ、唄は悲しく長く終つて行つた。ピアノのトーンはつゞいて、はたとぎれてしまつた。そして一瞬誰も共にすゝり泣いて眼をとぢた。ほつと胸の底から洩れる吐息、誰も身を忘れてゐた。

拍手の聲がつゞいて起つた。またつゞいて起つた。またつゞいて拍手はつゞけられて行つた。その時誰かど叫んだ。

『あ。』

黒い蝶はゆらゆらと倒れかゝつて、いま次の曲に移らうとして、拍手に手をひかへた直彦がとび立つてそれをさゝへやうとしてよろよろと共によろめいた。

『どうした!』

またつゞく拍手の嵐の中にその聲がおこつた。

しかし百合子は眼をつぶつたまゝ、足下が崩れて行くやうに感じて呟いた。

『もうだめ、私はだめ。』

聴衆の前列から誰かどかけ上つた。そして彼女を抱き上げて扉を破るやうに控室へ連れて行つた。が、拍手がまたおこつた、それは次の曲を彼女に向つて催促する、いたましくもうれしい聲であつた。直彦は立つたまゝうなだれて涙ぐんだ。

そして再び顔を上げた時、彼はすぐ聴衆に向つて手を上げた。彼等はすぐしづまつてしまつた。

『皆さん。』

直彦の聲は感激にふるえた。

「彼女は烈しい病氣をおして來ました。次の曲目は、またの機會を許して貰ひませう。私から代つてお願いするのです。」

聴衆はすぐ同情の拍手をつゞけて送つた。拍手は長く止まなかつたが、彼女は再び、そして永久に彼等の前に歸つて來なかつた。

しばらくして控室で、恥づかしくも眼をさました彼女は、そこに自分を見つめてゐる多くの眼を見つけた。

「許して下さい。」

彼女はすぐ直彦をみつけると、しづかに起き上つてうなだれた。直彦はすぐさみしくほゝえんだ。

「いゝえ、あれでいゝ、あれでいゝ。あなたは、ほんとに成功したのです。」

聴衆の中からかけ上つて、彼を抱きかゝへて來た長髪の人が、彼女を涙ぐましく見つめてほゝえんだ。

「私はKです。よくうたつてくれました。私は田内とは長い友人です。此頃逢ひませんけどね。」

Kはその唄の原作者の詩人であつた。

「あゝ、Kさん。」

しかしすぐに彼女は田内の名をきいて立ち上つた。それから身づくろひして燃えるやうな瞳を空にそゝいで呟いた。

「私に行かなければなりませんの。」

直彦がそれを止めた。

「いゝんですか、もう。」

「えゝ。」

彼女はすぐ涙ぐんで、直彦をぢつと見つめてさゝやいた。

「先生、これでお別れですの。」

「え。」

彼女はKに言つた。

「Kさんにも、はじめておめにかゝりましたけど、やはりもうお別れですの。」

彼女がそのまま行きかゝるのを直彦がまた引き止めた。

「薊さん、あなたは！」

「私。」

彼女はうなだれて歩きつづけた。それから戸口を出て立ち止まると、すぐ直彦に向つてさゝやいた。

「私、決心しましたの。」

「え。」

「一度、えゝ、一度、郷土に歸つて來たいのですの。ねえ、先生、私は今日、十二莊の池のそばで一日考へて居りました。そして少しの間でも、郷土へ行つてしづかに考へて來たくなりました。」

「お手紙を下さいよ。」

Kがそれに耳を傾けながら叫んだ。

「あなたの天才をほろぼさないやうに、私はそれを祈つてゐます。」

「さうだ、早く歸つていらつしやい。一日でも早くね。」

直彦もつづけた。

「はい。」

彼女は直彦の言葉になぜかうなだれた。それからしづかに二人をみつめて心にさゝやいた。「許して下さい、許して下さい、私は再び歸つて來ないのです。」とぼとぼと夜の闇に消えて行く彼女を二人は見送つた。それは永久の見送りであつたが、彼等はそれに氣づいてゐなかつた。

八

—後のエピソードとして—

薊百合子といふ一人の聲樂家は、天才としてその姿をあらはしたが、朝霧のやうにすぐ消えてしまつた。たゞその夜のことに、東京驛を田内春雄が立つて行く時、かなりに賑やかな見送りをとほくはなれて、一人の黒い喪服の女性が見送つてゐた。

涼しい瞳に涙をうかべて、女性はやがてしづかに立ち去つたが、その後そのことは、春雄が結

婚してからわかつた。そしてリングに添へられたさみしい言葉も彼に探し出された。
また彼がその後直彦に逢つた時、直彦は彼に彼女の長い手紙を見せてくれた。

私の姿をかくしましたのは、まことに申譯ございませんの。まことにまことに、先生にも、奥様にも、お世話になり甲斐もなきこと、どうぞどうぞお許し下さいませ。

けれど私のこの心は、たゞたゞあの人のために末よかれと祈るばかり、私ガもし樂界にゐれば、あの人もいつかは互に顔を合せ、末のためわるいと考へたからですの。これも皆世の冷たい故と思へば、誰をうらむこともなく、たゞたゞ前生の宿命とあきらめてさみしく日をすごしてゐますわ。

私のその後は、故里なつかしく歸つてみても、おぢいさまはまだまだお怒りとけず、お許しなくともおそばにとおもへど、それも許して下さらなかつたのですの。

いろいろの悲しいこと、さみしいこと、つもりつもつて、薊の花は、咲いてもさはられぬ、それがよいと思ひきめましたの。そしてその後、山莊の老尼さまに願ひして、こゝに一月ほど、

有髪の尼の日をおくつてまゐりましたの。

私として浮世にのぞみもなく、このまゝ埋もれてゆく望み、いまは老尼さまも、よくよくわかつて下さいました。そして愈々明日、剃髪して、この生ながらの死の境涯に身を沈めることになりました。

山莊と申せば、高い山の上、どこぞとに人に恥づかしく見られることもなく、またその身ながらの佛の境には、愛も悩みも清らかに失せて、いまは去りゆくことは夢、たゞたゞその人の長く幸福にゐられるやうに祈るばかりでございますの。すぎ去つた夢はなつかしく悲しく、時に風の音に涙にくれることがあつても、その涙も思出ばかり故、身を燃やすこともなく、安心の境涯、さみしくもいまはもはや、凡てを忘れて行く身になりましたの。

いづれ、世は春ともなれ、この薊の花は、かうして早く散つて、茨の刺の人に思ひをのこさぬやう。たゞたゞ最後に、先生さまはじめ奥様のために、御幸福をお祈り申して筆をおきますこと、どうぞ、どうぞお許し下さいませ。

いまはこの身になりまして、その人の面影も世に思ひを残す種子、別封にてお送り申しました故、よき折にその人の手許に差上げ下さいますやう。この頃はおちいさまも心折れて、半里の山づたひをはるはる山莊までこられて、長き物語も一二度いたしましたの。さらば、再び生れかはずてならば、よき夢に逢ふこともあればと、心にさみしく祈つて、涙ながらに、おなつかしきたよりを、これより長く長く終りとして、おめにもかゝらず、おたよりもいたよかぬこそ、かへつてかへつて、私にとつてのおめぐみでございますの。右、どうぞ、どうぞ、おくみとり下さいませ。(所も知らぬ山莊の尼庵にて、薊より)

冬枯の風が、雪を催す十二月になつて、田内春雄は結婚の夢のさめないあたゝかい家から、とほく湯ヶ原の里を一人たづねた。それはいたましい愛人の、その許しを願ふため、そしてまたその人のために出来るならば、あたゝかい家をでも里近く建てたいためでもあつた。けれどその前日から、雪が烈しく降り亂れて、山は一層深く白く、彼はたゞ彼女の老祖父に逢へただけであつた。彼の心はいたんでも、清らかな山莊の夢を、昔の愛慾が汚すことを恐れた

からであらうか。

それは知らぬ。

たゞ、さみしい薊の花は地に落ちる前でも、人にさはられるのを嫌つて、自から刺をいたくとがらせた。あゝけれど、その刺こそ、薊の悲しい姿でなくてなんであらう。そして花は枯れ、人は死ぬ、永遠の聲におくられて、消えはてしまふのは、たゞ風ばかりではなかつた。美しいものも、悲しいものも、醜いものも、よろこべるものも、一樣にこの運命から逃げられない、それが人生の定めであつた。

その後田内家に引取られた泉姓の一人の青年があつたが、その人は姉に代つて、樂界に志したといふことであつた。

その青年に春雄が語つた。

『みめかたちの美しい人はこの生にゐる。しかし心の美しい人は少いのだ。そして心の美しい人こそ、美しい聲を持つてゐた。』

薊の花といへど、その心美しければ、美しくこの生をうたつて、春と秋を、美しくすこす

あらう。生にかくれて、花は叢に埋もれてしまつたが、永遠の星はその上に輝いてゐるのだ。さうしてその星の光の中にも、愛の唄はたしかに高くひびいて、彼女の清らかにさびしい生涯を、なくさめ淨めてゐた。

「薊の花」のために

長い間心がけてゐた抒情的の長篇小説を漸く一冊だけ書き上げることが出来た。かうした意味での作品は、詩を散文にこめたものとして、かなり長く私の胸底に企てられてゐたものである。たゞこの内在的な企てが、時を得なかつたため、今迄のびてしまつたことは、私としてかなり鬱懐であつたが、漸くこの「薊の花」を書き上げて、その希望をはたすと共に、心も晴れて来たやうな気がする。これは一面に於て、長篇散文詩に似てゐるが、他面に於ては、詩よりか物語としてのテーマをつかんで書きつゞけてゐる點で、小説により多く近いことは、讀者の知られるところであらう。

この叙事詩や散文詩と違つたところに、この作品の興味と、より廣い性質があることも考へられると思ふのである。

『醜もまた美である。』

この題目は多く、ボードレール等の近代の頽廢詩を生んでゐる。私は「薊の花」の中で、それ

と違つた魂の美しさを取り扱つた。そして一つのロマンスを、その美しさから生まうとした。しかしこの意圖が成功してゐるかどうかは、讀者によつて鑑賞される外はない。

たゞ作者としては、これを抒情的な長篇小説の第一作として、より更によきものを生まうとするために、この作の一部分に不満を持つことは事實である。しかしそれがためにほどこした改作によつて、多少私もその不満を除き得て、とにかくこれだけにまとめて見た。

なほこの作は二月にテーマを得て、五月にかなりまで手をつけ、また近く改作と追補とを施してまとめたので、その間にテーマの主要な部分にもあきたらないところが出来て来てしまつた。ある意味に於ては未完成の完成を、この作品は示してゐるかも知れない。私はそのことを告げることによつて、作品といふものは、いつも次に生まれるものゝ豫約として、作者の一つの過程を示してゐることが常であることも、讀者に理解して頂きたいと思つてゐるのである。

以上、この新作に對する感想をのべてみたが、より多く讀者によつて、讀後の感想が作者で送られるならば、次の作品のためのよい示唆が得られるであらうことを、更に願つておく。

「薊の花」完成の夜・大正十五年七月

東京市外世田ヶ谷下北澤八〇九 著 者

大正十五年九月一日印 刷
大正十五年九月十日發 行

薊の花

不許複製



定價一圓二錢

著作者	福田正夫
發行者	飯尾謙藏 東京市神田區南神保町十六番地
印刷者	近藤喜七 東京市芝區櫻川町二番地

發行所

交蘭社

電話四谷
六八四二

振替口座東京四〇二七九番

東京市神田區南神保町十六番地

交蘭社發行優良書類

加藤武雄 先生著	生田春月 先生著	吉屋信子 先生著	吉屋信子 先生著	吉井勇 先生著	吉屋信子 先生著	西條八十 先生著	福田正夫 先生著
長編 小説	長編 小説	長編 小説	短編 集	自歌 自釋	短編 集	自第一卷 至第五卷	小曲 詩集
彼女の貞操	二つの結婚	屋根裏の二處女	古き哀愁	戀	花物語	巴里小曲集	夢見草
金三圓 送書留十八錢	金一圓 送書留十六錢	金二圓二十錢 送書留十八錢	金一圓四十錢 送書留十八錢	金一圓四十錢 送書留十八錢	各一圓五十錢 送書留十八錢	金一圓四十錢 送書留十八錢	金一圓三十錢 送書留十六錢